

櫛形町文化財調査報告書 No.23

# 新居田B遺跡

—中山間地域総合整備事業 巨摩の郷地区  
農道第11号建設に伴う発掘調査報告書—

2002. 3

櫛形町教育委員会  
峡中地域振興局農務部

櫛形町文化財調査報告書No.23 新居田B遺跡 正誤表

以下のように訂正します

		誤		正
21 頁	第 7 表	2 石材	黒曜石	→ 砂質頁岩
35 頁	4 行目		6	→ 4

櫛形町教育員会

櫛形町文化財調査報告書 No.23

# 新居田B遺跡

——中山間地域総合整備事業 巨摩の郷地区  
農道第11号建設に伴う発掘調査報告書——

2002.3

櫛形町教育委員会  
峡中地域振興局農務部



1号埋設土器



15号土坑出土土器

## 序 文

檍形町平岡地区は、昔から水田・養蚕が盛んな地域でしたが現在は果樹栽培に転換する農家も多く見られます。新居田B遺跡のあるこの地域は近年、富士川西部広域農道が整備され、平成11年にはその沿線に農村地域活性化総合整備事業として「ほたるみ館」が建設されました。また、周辺の農道も改良整備され地元農業の活性化の拠点として期待されています。

この度、新居田地内において「中山間地域総合整備事業 巨摩の郷地区農道第11号」として、漆川を望む崖際周辺を通る農道の拡幅および新設工事が実施されることに先立ち、埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしましたところ、崖際であったにもかかわらず縄文時代や弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴式住居址や、縄文時代晚期～弥生時代中期の土坑が複数発見されました。

今回の調査で注目すべき成果は、山梨県内でも発見例の稀な縄文時代晚期～弥生時代中期の資料の発見であります。中でも縄文時代晚期や弥生時代中期初頭の資料が土坑に伴って発見されたことは山梨県内でも非常に珍しく、空白であった時代を解明するうえで非常に貴重な資料といえます。

記録保存のための発掘調査ではありますが、わが町の先人達の営みを解明する成果は着実に積み重なってきており、発掘調査を実施する毎に町内ののみならず山梨県内の歴史を考えるうえで貴重な成果が得られております。

これらの成果は、町民が地域の豊かな歴史を学び、そこから誇りともいべき地域の良さを次世代へと伝え、地域の未来を創生していく糸口として大きな意味をもつものといえましょう。未来へ向けこのような資料を地元町民の学習の機会へと活用していかないと考えております。

事業主体である峡中地域振興局農務部ならびに地元平岡区の皆様には埋蔵文化財の取り扱いについてのご理解を頂き、惜しみないご協力のもと円滑な記録保存を成し遂げることができましたことに対し、深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、今回の調査、報告書作成にご指導ご協力くださった皆様に対し厚く御礼申し上げるとともに、本書が広く活用され文化財の保護に役立つことを願い序文といたします。

平成14年3月

檍形町教育委員会  
教育長 中込脩

## 例　　言

1. 本書は「中山間地域総合整備事業 巨摩の郷地区 農道第11号」建設に伴い、県中地域振興局の委託を受け檍形町教育委員会が実施した、山梨県中巨摩郡檍形町平岡字新居田1142他における新居田B遺跡の発掘調査報告書である。
2. 檍形町教育委員会の実施した新居田B遺跡の調査事業費は原因者の全額負担による。
3. 発掘調査は平成13年4月18日～4月28日（1区）、5月24日～6月29日（2・3区）に実施され、整理作業および報告書の作成は平成14年3月まで行った。
4. 調査組織および調査参加者は以下の通りである。

調査主体者　檍形町教育委員会　教育長 中込 緒  
調査担当者　保阪太一（檍形町教育委員会 文化財主事）  
調　　査　　員　若林初美  
事　　務　　局　檍形町教育委員会生涯学習課文化振興係  
調査・整理作業員　加藤由利子・神田久美子・小林英咲枝・鈴木アサ江・深澤敬子  
　　　　　　　　山井伴三
5. 本報告書の執筆分担は以下の通りである。

第IV章……株式会社パリノ・サーヴェイ株式会社（了解のもと保阪により一部加筆修正）  
その他……保阪
6. 本報告書の編集及び写真撮影は保阪が、図面作成は若林を中心に行った。
7. 調査において以下の業務を委託した。

自然科学分析……パリノ・サーヴェイ株式会社  
出土遺物の一部実測……株式会社シン技術コンサル
8. 発掘調査及び報告書作成において下記の諸氏から多大なるご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

石川日出志・今福利恵・小川卓也・黒沢 浩・齊藤秀樹・佐野 隆・田中大輔・中島広顯・中山誠二  
廣瀬和弘・保坂和博・三田村美彦
9. 本報告書に関する出土品及び記録図面、写真等は檍形町教育委員会に保存してある。

## 凡　　例

1. 遺構・遺物図版中における指示は次の通りである。
  - ・遺構図版中の水系レベルは海拔高を示し、単位はmである。
  - ・遺構図版中のスクリーントーン及びドットの説明は図中に示してある。
  - ・方位は磁北を示す。
  - ・遺物番号は本文・挿図・表で全て一致する。
2. 本書で使用した地図は、1:25,000地形図「小笠原」（国土地理院）である。
3. 本書で用いた土器型式名は原則的に「山梨県史 資料編2」を踏襲した。

# 目 次

## 例言・凡例

第Ⅰ章 遺跡の概観	1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 立地環境	3
第3節 周辺の遺跡	5
第4節 既往の調査	5
第Ⅱ章 調査の概要	6
第1節 調査に至る経緯	6
第2節 調査の方法と経過	9
第3節 基本層序	9
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物	11
第1節 概 要	11
第2節 竪穴式住居址	11
第3節 竪穴状遺構	18
第4節 埋設土器	19
第5節 土坑・ピット・流路	20
第6節 遺構外出土遺物	36
第Ⅳ章 自然科学分析	39
第Ⅴ章 調査の成果と課題	43
第1節 各時代の新居田B遺跡の様相	43
第2節 土坑について	44
第3節 新居田B遺跡の存在	45

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図(1/25,000) .....	1	第21図 1区8号土坑(1/40) .....	25
第2図 周辺地形図(1) .....	2	第22図 2区9号・23号土坑(1/40・1/3) .....	25
第3図 遺跡位置及び主要遺跡分布図(1/50,000) .....	2	第23図 1・2区17号～20号土坑・ピット4・5(1/40・1/3) .....	26
第4図 遺跡周辺地形図(1/2,500) .....	4	第24図 2区21号土坑(1/40) .....	27
第5図 遺跡周辺図(1/2,000) .....	7	第25図 1区22号土坑(1/40) .....	27
第6図 調査区全体及び試掘レンチ配置図(1/500・1/200・1/2,000) .....	8	第26図 1区ピット1～3(1/40・1/3) .....	28
第7図 造構配置図(1/80・1/200) .....	10	第27図 3区土坑・流路(1/120) .....	28
第8図 1号住居址(1/30・1/60) .....	12	第28図 3区10号土坑(1/40・1/3) .....	29
第9図 1号住居址(2)(1/3・1/1) .....	13	第29図 3区11号土坑・3号流路(1/40・1/3) .....	30
第10図 2号住居址(1/60・1/3) .....	14	第30図 3区12号土坑・4号流路(1/40・1/3) .....	32
第11図 3号住居址(1)(1/60・1/30) .....	16	第31図 3区13号土坑(1/40・1/3) .....	33
第12図 3号住居址(2)(1/3・1/1) .....	17	第32図 3区14号土坑・5号流路(1/40・1/3) .....	34
第13図 1号竪穴状遺構(1/60・1/3・1/1) .....	18	第33図 3区15号土坑(1/40・1/3) .....	35
第14図 1号埋設土器(1/15・1/3) .....	19	第34図 3区16号土坑(1/40) .....	36
第15図 1・2区土坑・ピット・流路(1/120) .....	20	第35図 造構外出土土器(1/3) .....	37
第16図 1区1号土坑(1/40・1/3・1/1) .....	20	第36図 造構外出土石器(1/1・1/3) .....	38
第17図 1区2号土坑(1/40・1/3) .....	21	第37図 土壌サンプル採取箇所(1/80) .....	40
第18図 1区3～6号土坑(1)(1/40・1/3) .....	22	第38図 リン酸と腐植の相關関係 .....	42
第19図 1区3～6号土坑(2)(1/3・1/1) .....	23	第39図 新居田B遺跡・周辺遺跡造構配置図(1/1800) .....	47
第20図 1区7号土坑(1/40) .....	24		

## 表 目 次

第1表 1号住居址出土遺物観察表 .....	13	第13表 10号土坑出土遺物観察表 .....	29
第2表 2号住居址出土遺物観察表 .....	14	第14表 11号土坑・3号流路出土遺物観察表 .....	29
第3表 3号住居址出土遺物観察表 .....	15	第15表 4号流路出土遺物観察表 .....	31
第4表 1号竪穴状遺構出土遺物観察表 .....	18	第16表 13号土坑出土遺物観察表 .....	33
第5表 1号埋設土器出土遺物観察表 .....	19	第17表 14号土坑・5号流路出土遺物観察表 .....	33
第6表 1号土坑出土遺物観察表 .....	20	第18表 15号土坑出土遺物観察表 .....	36
第7表 2号土坑出土遺物観察表 .....	21	第19表 造構外出土遺物観察表(1) .....	37
第8表 3～5号土坑出土遺物観察表 .....	23	第20表 造構外出土遺物観察表(2) .....	38
第9表 7号土坑出土遺物観察表 .....	24	第21表 分析資料の一覧 .....	39
第10表 9・23号土坑出土遺物観察表 .....	25	第22表 土壌理化分析結果 .....	41
第11表 20号土坑出土遺物観察表 .....	27	第23表 土坑規模比較表 .....	44
第12表 3号ピット出土遺物観察表 .....	28		

## 写真図版目次

- 卷頭図版 1号埋設土器 15号土坑出土土器
- 図版1 1区 1区全景(東より) 1区全景(西より) 2号住居址確認範囲 2号住居址
- 図版2 1区土坑 1区土坑群(東より) 1号土坑 7号土坑 2号土坑 同 セクション 3号~6号土坑  
8号土坑 埋設土器出土状況
- 図版3 2区 2区全景(西より) 1号住居址(東より) 1号住居址遺物出土状況  
1号住居址(上より) 3号住居址・1号住居址セクション 同 出土遺物
- 図版4 2区 3号住居址 同 炉 同 炉検出状況 9号土坑 同 セクション 21号土坑
- 図版5 3区 3区全景(西より) 3区全景(東より) 3区土坑群 3区土坑群(東より)  
3区土坑群周辺遺物出土状況
- 図版6 3区 10号土坑 15号土坑 15号土坑遺物出土状況 11号土坑 11号土坑遺物出土状況  
12・13号土坑 14号土坑・5号流路遺物出土状況 14号土坑セクション 14号土坑
- 図版7 2区作業風景 3区作業風景 3区落込セクション 3区基本土層
- 図版8 3号住居址出土 遺構外出土(縄文時代中期) 1号住居址出土 1号竪穴状遺構出土  
2号住居址出土
- 図版9 1号埋設土器 1区土坑出土 1区土坑・ピット出土 2区土坑出土 3区土坑出土  
15号土坑出土
- 図版10 3区3号流路出土 3区4号流路出土 3区5号流路出土 遺構外出土  
遺構外出土(古墳~平安) 3号住居址出土 1号竪穴状遺構出土 1号住居址出土  
3区土坑出土 1・2区土坑出土

# 第Ⅰ章 遺跡の概観

## 第1節 遺跡の位置 (第1図)

新居田B遺跡は、梅形町のほぼ中央を南北に縱走する富士川西部広域農道と、新興団地として有名なコモンティあやめが丘と共に挟まれた梅形町平岡字新居田に位置し、眼下に漆川を望む崖際に存在する。

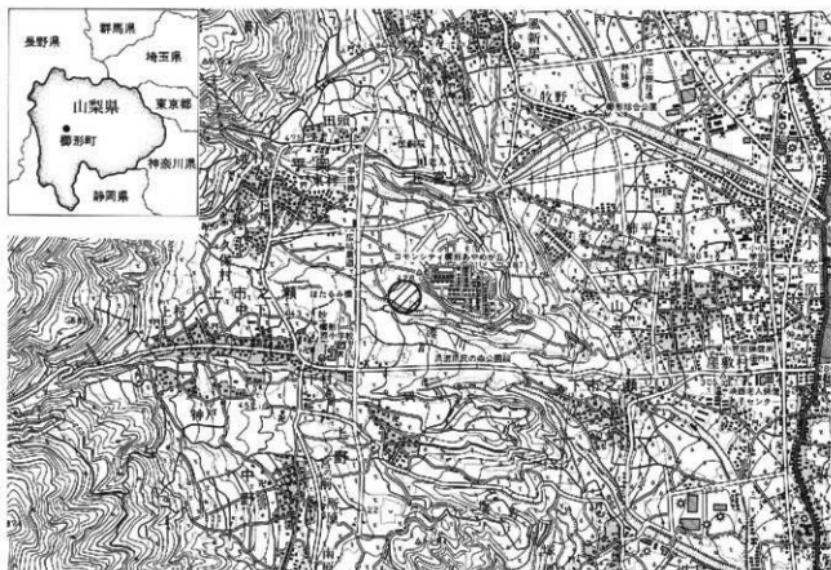
あやめが丘と広域農道を結ぶ位置に近年広い農道が整備され、その周りには果樹畑が広がっている。漆川の流れれる谷に面する南側斜面地では果樹畑や水田が広がるもの、新居田B遺跡が存在する崖際周辺は農道の整備が不十分な箇所もあり今回整備されることとなった地域である。

新居田B遺跡のある平岡の地は昔から水田・養蚕が盛んな地域であり、昭和30年代には国事業である新農村地建設事業の成果もあり、全耕作地の67%近く、樹園地に限れば実に99.6%が桑園でその他ほとんどが水田であったという。しかしその後養蚕業は減る一方となり、それに伴って桑園は桃やすもを中心とする果樹畑へと変化し現在へと至っている。

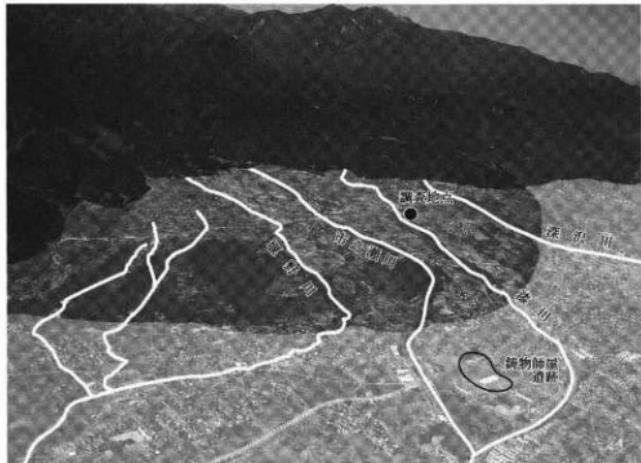
周辺には富士川西部広域農道も整備され、地元農業の活性化を促す施設として「はたるみ館」が建設され、農作物が並ぶ朝市などで賑わっている。

このように当遺跡周辺地域は梅形町西地区の農業活性化の拠点的役割を担っているといえる。

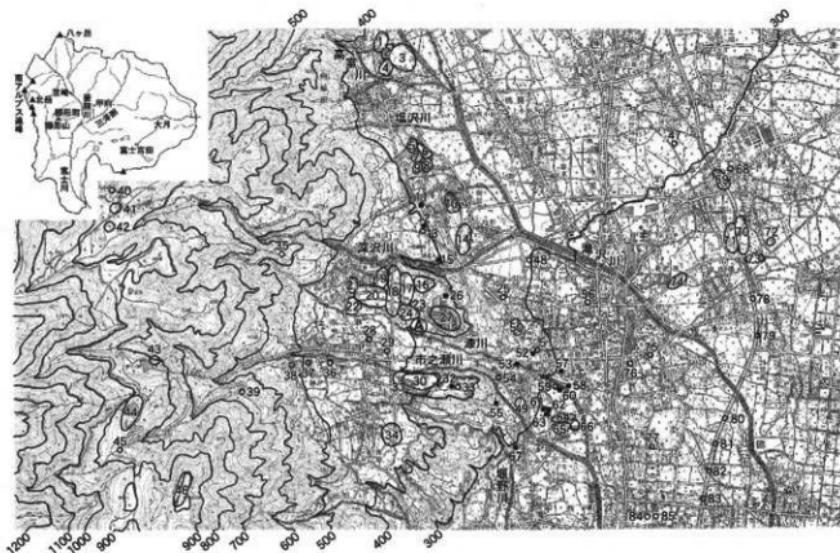
この地から漆川を挟んだ対岸には一面に棚田が広がり、東側を望むと、あやめが丘の団地の向こうに梅形町の中心地である小笠原の町並みを眺めることができ、さらにその奥には甲府盆地全体が一望できるという、非常に見晴らしのよい立地である。



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)



第2図 周辺地形図(1) ■…市之瀬台地 ▲…扇状地



1. 北原A	2. 北原B	3. 北原C	4. 北原D	5. 北原A	6. 北原B	7. 北原C	8. 神明A
9. 北新宿C	10. 畦坪	11. 無名塙	12. 開崎古墳	13. 御崎神社裏	14. 菅畠	15. 無名塙	16. 東原B
17. 長田A	18. 舂田口	19. 宮原A	20. 中畠	21. 潤手作	22. 久保田A	23. 長田B	24. 新宿A
25. 曹洞寺横	26. 六糸丘古墳	27. 六糸丘	28. 右原田	29. 清水A	30. 梅城	31. 上の山	32. 上ノ東古墳
33. 上ノ東	34. 古屋敷	35. 佐曾	36. 下杉木A	37. 上杉木B	38. 上杉木A	39. 梅形山中A	40. 高尾北畠
41. 高尾丸山	42. 高尾大清水	43. 伊奈ヶ瀬	44. 南伊奈ヶ瀬	45. 梅形山中B	46. 中野城	47. 赤面C	48. 稲平A
49. 濱道	50. 収下	51. 宝珠寺西	52. コウモリ原古墳	53. 日暮口古墳	54. 下南之郷大畠A	55. 物見塚古墳	56. (6)小笠原氏船
57. 無名塙	58. 岩土塚古墳	59. 茅原A	60. 亂原古墳	61. 銀物師塚古墳	62. 無名塙	63. 無名塙	64. 川上道下
65. 銀物師塚	66. 木	67. 鶴原上村古墳	68. 穂戸学校	69. 十五所	70. 村前東A	71. 村前東B	72. 前原G
73. 角力場第二	74. 斧把B	75. 東出口	76. 下宮跡	77. 村内	78. 新若道下	79. 二本柳	80. 向河原
81. 油田	82. 中川田	83. 大津東舟保	84. 佐吉	85. 西川	Ⓐ 新居田B		

第3図 遺跡位置及び主要遺跡分布図 (1/50,000)

## 第2節 立地環境（第2図）

### 周辺の地形

新居田B遺跡は市之瀬台地のほぼ中央に立地し、西に南アルプスの前衛、巨摩山地の主峰である櫛形山を控え、東の眼下に甲府盆地を望む。

周辺の地形を概観すると、日本を東西に二分する大構造、フォッサマグナの西縁を限る糸魚川・静岡構造線が南北に走り甲府盆地の西端を画している。断層は甲府盆地の西端では幾重にも発達しており、大きな地形の変換点を成し、櫛形町周辺では「南アルプス」と櫛形山を主峰とする「巨摩山地」を隔て、その東麓では伊奈ヶ湖断層崖をもって「市之瀬台地」、さらに下市之瀬断層崖によって甲府盆地西端の「複合扇状地」へと至り、大きく3地形を形成している。

巨摩山地は3,000m級の高峰が連なる南アルプスの前衛で、その主峰である標高2,050mを測る櫛形山には8万年前からの生息が確認されている東洋一の規模を誇るアヤメの自然群落や、カラマツ、シラビソなどの原生林が広がっている。巨摩山地の東側は急斜面をもって標高を減じ低い丘陵性の山地及び台地へと低下する。櫛形山の東麓に広がる市之瀬台地は、伊奈ヶ湖断層前面に発達した洪積扇状地が甲府盆地形成に伴った最も新しい地盤変動によって形成された丘陵状の地形である。台地は南北4km、東西2.5kmの扇形平面形を呈し、標高は400~500mを測る。

この市之瀬台地上面は、櫛形山を水源とする北から高室川・塩沢川・深沢川・漆川・市之瀬川等が流れ、侵食地形を呈している。これらの河川が形成した谷に挟まれ、東側へと舌状に張り出した小支川が北から曲輪田、伝嗣院、平岡(六科丘)、上野山、御殿山などと並び扇状地を望んでいる。台地前面は比高差100~120mを有する下市之瀬断層崖を経て盆地床の扇状地へと至る。また、台地先端には、断層運動に伴って発達した小円頂丘が並び、これらの西側は緩やかな逆傾斜面を経て西方山麓に向かい順次標高を増していく。台地基盤は櫛形山塊から流れ出した古い扇状地堆積物で、その上面を火山性堆積物に覆われている。

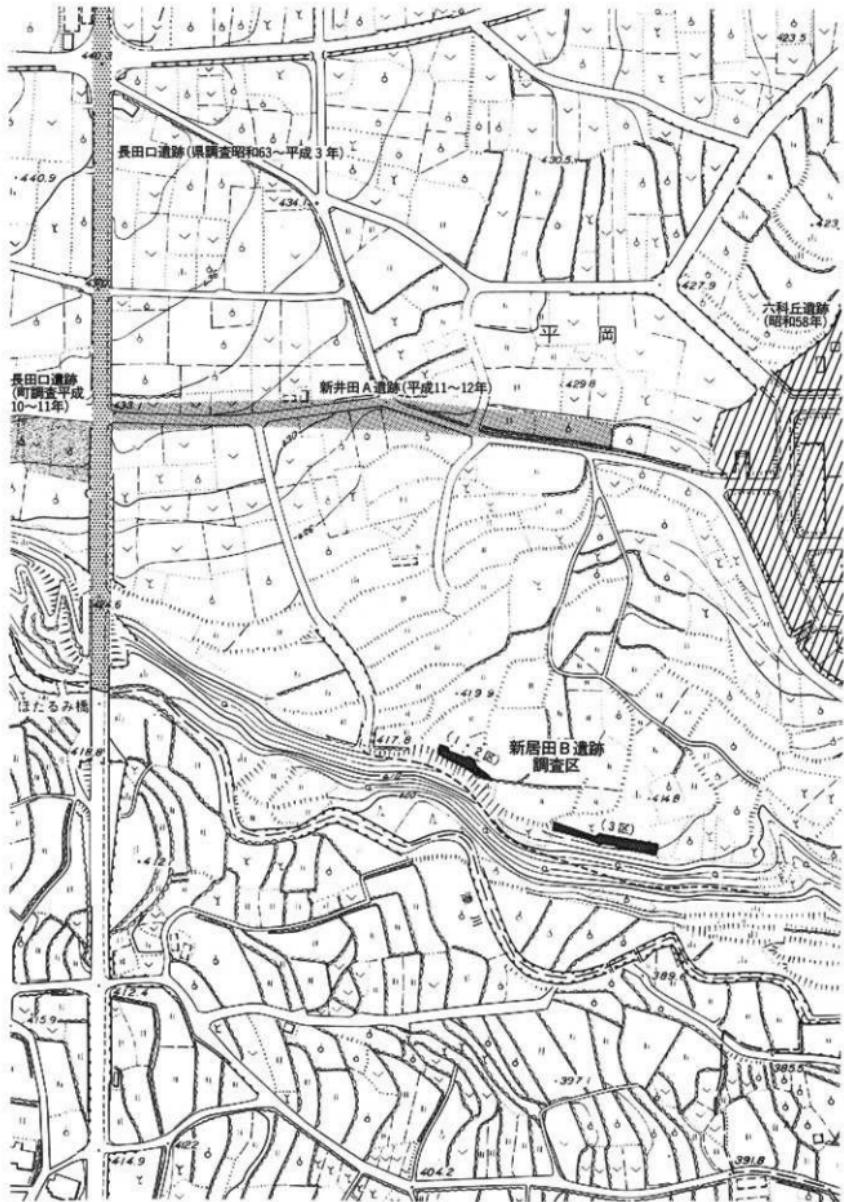
台地を流れる河川は上流では18~22°という急勾配をもって流れ落ち、盆地床に至ると急激に流勢を弱め、自ら削りだした大量の土砂を堆積させる。こうして各谷から流れ出た土砂は、御動使川の形成する大扇状地と相まって複雑な「複合扇状地」を成している。

これらの扇状地の扇部にある桃園・小笠原・十五所・下市之瀬などは、古来「原七郷」と呼ばれ「原七郷は月夜でも焼ける」といわれるほど極めて地下水位が低い乾燥地帯であり、また、豪雨時などには洪水に襲われるなど水田経営に向かない土地として知られている。一方、渋みこんだ水は扇端部で再び湧き出し、若草町の鏡中条・十日市場・甲西町の江原・鮎沢等と弧状に湧泉列を成す。水が豊富なこの一帯は「田方」と呼ばれる。また、台地から扇頂部にかけては「根方」と呼ばれ、谷川の水を利用した水田や畠に利用されてきた。

### 遺跡の立地（第2・3・4図）

新居田B遺跡は市之瀬台地のほぼ中央、それぞれ東流する北は深沢川、南は漆川によって開析された谷地に挟まれた平岡の舌状台地の南面に立地し、標高約414~420mを測る。

台地は概ね東へ傾斜しているが、先述したように先端付近で再び標高を増し小円頂丘を形成する（現在は削平され住宅地となっている）。そのため小円頂丘の南西側に、漆川へと向かう小支谷がみとめられる。既存の農道11号はその谷地形を利用して通っており、新居田B遺跡はそれぞれの谷地に挟まれるように張り出す東南方向に傾斜する小規模な舌状台地の端、漆川を眼下に望み高低差約20mを測る崖際に立地する。現在は水田や果樹を中心とする耕作地として利用されており、また、崖壁を要壁が巡っていることから、多少なりとも地形の変容は否定できない。



第4図 遺跡周辺地形図(2) (1/2,500)

### 第3節 周辺の遺跡（第2図）

新居田B遺跡の所在する櫛形町周辺には多数の遺跡の存在が確認されており、地形による分布は、櫛形町の埋蔵文化財への取り組みの契機となった六科丘遺跡をはじめとして市之瀬台地上に古くから認識してきた。しかし最近の調査成果から扇状地である低地部にも集落遺跡などの分布がみられるよう認識を新たにしている。反面、山地には遺跡の分布は薄いものの、伊奈ヶ湖周辺など水辺傍の縄文時代の遺跡や中世城館跡などがみられる。

櫛形町において最も時代を遡って人々の存在を証明する資料は、市之瀬台地上の遺跡から出土する旧石器時代のナイフ形石器である。およそ2万5千年前のこの地で人々がなんらかの活動をしていたことが確認されている。台地上には、以米縄文時代から連続と続く人々の営みの跡が確認される。

縄文時代としては早期から晩期までの遺物が出土している。縄文時代以降人々が活躍する場として、近年開発に伴う発掘調査が集中し成果の蓄積が著しい本遺跡の立地する平岡の台地上が挙げられる。ここには、弥生時代後期～古墳時代の集落を中心としながらも、旧石器時代からの遺物を出土する六科丘遺跡（27）や、旧石器時代ナイフ形石器の出土や縄文時代中期初頭から古墳時代の住居址まで広く分布する長田口遺跡（18）が存在する。また、長田口遺跡では晩期の土器片を有する土坑や、条痕文系土器片も検出されている。新居田A遺跡（24）は前述する二つの遺跡の間に位置し、中間的な様相を示している。深沢川の北側の低台地には、縄文時代早期から後期初頭までの遺物がみとめられる曾根遺跡（14）が存在する。南へと目を移すと、漆川と市之瀬川とに挟まれた台地線辺には陝西地域初の敷石住居址が検出された横道遺跡（49）がある。市之瀬川と北沢川とに挟まれた舌状を呈する台地上には縄文時代、弥生時代の集落である上の山遺跡（31）、上ノ東遺跡（33）などがある。これら甲府盆地を望む小丘の先端にはそれぞれ古墳が築かれている。北から無名塚（11）、御崎古墳（12）、無名塚（15）、六科丘古墳（26）、陝西地域唯一の前方後円墳である物見塚古墳（55）、上ノ東古墳（32）である。

扇状地に立地する遺跡を眺めると、近年の調査によりそれまでに例の少ない縄文時代の集落の存在が判明した。高室川の北側には縄文時代中期中葉～後葉の拠点集落である北原C遺跡（3）が、また漆川と市之瀬川が合流する地点に、縄文時代中期中葉の鍛物師屋遺跡（65）・メ木遺跡（66）がある。鍛物師屋遺跡・メ木遺跡から出土した遺物は国重要文化財に指定されている。また、平安時代の住居址が119軒検出されており「大井郷」と推定される巨大集落としても注目されたい。これらのように扇状地においても、台地に程近い河川傍には縄文時代の集落が存在することが認識されつつある。さらに台地からはなれると、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の方形周溝墓群の十五所遺跡（69）で調査が実施され、厚い土砂に覆われた深い位置での構造の検出となった。また、深沢川に程近い社祀B遺跡（74）では弥生時代～平安時代の集落が検出されている。また、八田畠遺跡では構造は明確ではないものの弥生時代前期まで遡るであろう条痕文系土器片が多量に出土している。甲西バイパスやその周辺地域での道路建設に伴う白根町横堀遺跡、若草町などの扇状地の遺跡でも同じ傾向がある。櫛形を中心とする扇状地には明確な構造はないものの弥生時代条痕文系の土器片が多数確認されているのである。

数々の発掘調査の成果により、陝西地域の歴史は生まれ変わろうとしている。

### 第4節 既往の調査（第4・5図）

これまでみてきたように新居田B遺跡の調査区を囲むように、住宅開発や農業活性化事業に伴い事前調査が実施されている。それらの成果はこれまでの調査報告書にて、隨時既往の調査成果としてまとめている。ここでは、訂正及び補足を中心に簡単に記す。

昭和58年 六科丘遺跡（住宅地造成事業に伴う事前調査）……面積約25,000m<sup>2</sup>

櫛形町において民間開発に伴い初めて実施された事前調査であり、わが町の埋蔵文化財行政への取り組みの契機となった調査である。

検出遺構・遺物：旧石器時代、縄文時代早期から晩期までの遺物や立位の石棒など祭祀の場を想定させる遺構。

弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴式住居址33軒、掘立柱建物跡4棟など。

S字状口縁台付甕の口縁部破片が出土。

六科丘古墳は遺跡の北端部に位置し、2m程の貼り出し部を有する直径24mの円墳である。

昭和63～平成3年 長田口遺跡（富士川西部広域農道建設に伴う事前調査）……面積約5,000m<sup>2</sup>

検出遺構・遺物：縄文時代中期の竪穴式住居址4軒（五領ヶ台～猪沢期の住居址2軒、時期不明2軒）。

弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器群及び竪穴住居址25軒など。

調査区最南端で縄文時代晚期冰水の土器片が遺構外で出土。弥生時代前期末～中期初頭とみられる条痕文系の土器片も出土している。また、中世地下式塙が13基検出されている。

平成10～11年 長田口遺跡（中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う事前調査）……面積約1,589m<sup>2</sup>

検出遺構・遺物：縄文時代以前では縄文時代後期初頭～前葉の土器が主体。旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代中期五領ヶ台式～猪沢式期の土器片、晚期女鳥羽川式土器片10点が出土した土坑などが注目される。弥生時代以降では弥生時代後期後半～古墳時代初頭の竪穴式住居址が9軒。古墳出現期における北陸系、尾張系の資料も注目される。

平成11～12年 新居田A遺跡（農村地域活性化農道整備事業に伴う事前調査）……面積1,450m<sup>2</sup>

検出遺構・遺物：旧石器もしくは縄文時代草創期の槍先形尖頭器。

縄文時代中期竪穴式住居址3軒。うち五領ヶ台式～猪沢式期1軒、曾利式期1軒、不明1軒。

弥生時代後期末～古墳時代前期の竪穴式住居址が7軒。漆川方面へと流れ込む流路跡10条。

## 第II章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

これまでみてきたように、当該地域は、農業地として非常に重要な地域として位置付けられている。

今回、「中山間地域総合整備事業」として、「ほたるみ館（巨摩の郷地区彫形活性化施設）」とコモンシティあやめが丘と結ぶ農道から、標高を減じながら漆側を望む崖際の果樹・水田地帯を通る農道11号線の拡幅及び新設工事を計画があがった。平成12年春、工事主体者である峡中土地改良事務所（現峡中地域振興局農務部）から柳町役場農林商工課を介し、教育委員会へ埋蔵文化財の取り扱いに対する問い合わせがあった。事業計画地の一部が「文化財保護法第57条の3第1項に言う「周知の埋蔵文化財包蔵地」」の新居田B遺跡に該当し、また、新居田A遺跡の調査地点（「農村地域活性化農道整備事業」）から分岐する農道である点からも埋蔵文化財の存在が予測されたことから、試掘調査の必要の旨を回答した。

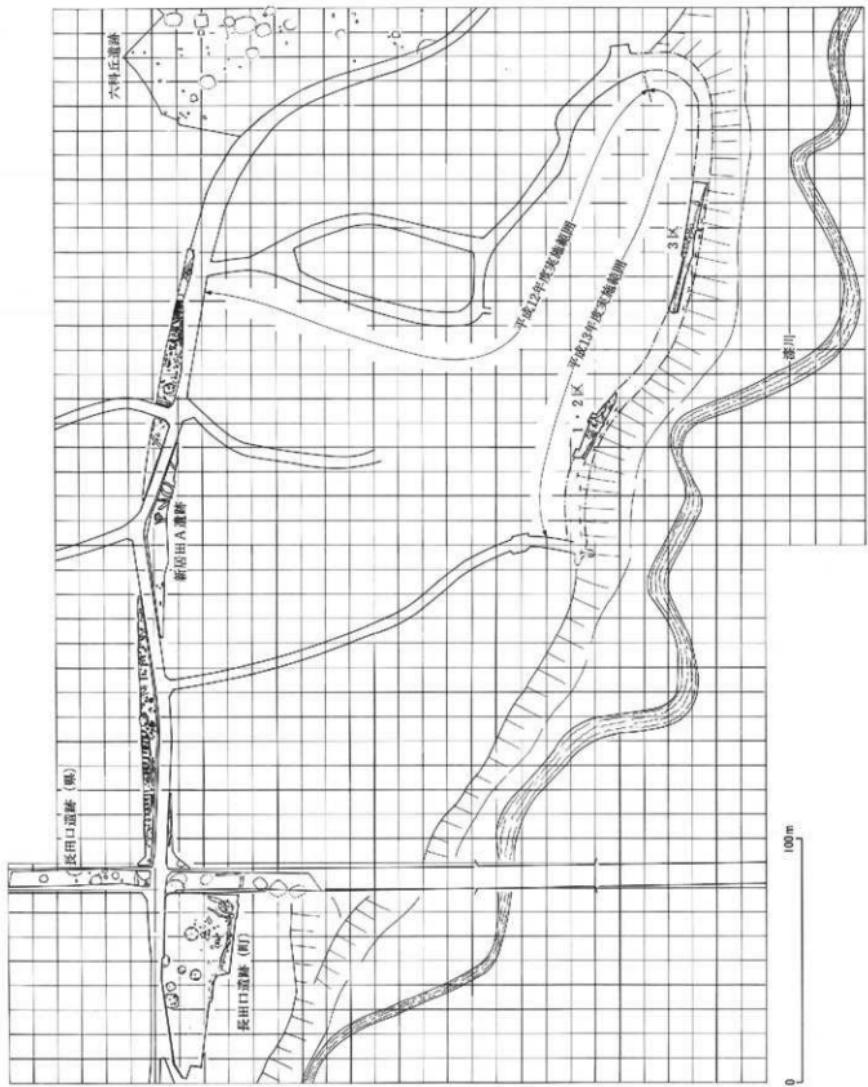
工事は、全工事区間の内、農道拡幅工事を実施する北側半分を平成12年度分、新居田B遺跡を通る農道新設工事を実施する南側半分を平成13年度分と2期に分けて実施することとなり、それぞれの区間にに対してスケジュールを調整し埋蔵文化財を取り扱うこととなった（第5図）。

平成12年度工事分は、平成12年10月16日～11月6日まで試掘調査を実施した。拡幅部分に全25箇所の試掘溝を入れたが、検出された遺構は自然流路のみで、遺物も黒曜石の剝片と縄文時代中期の土器片が極僅かに検出されたのみであった。よって、事前調査の必要はないものと判断された（第6図）。

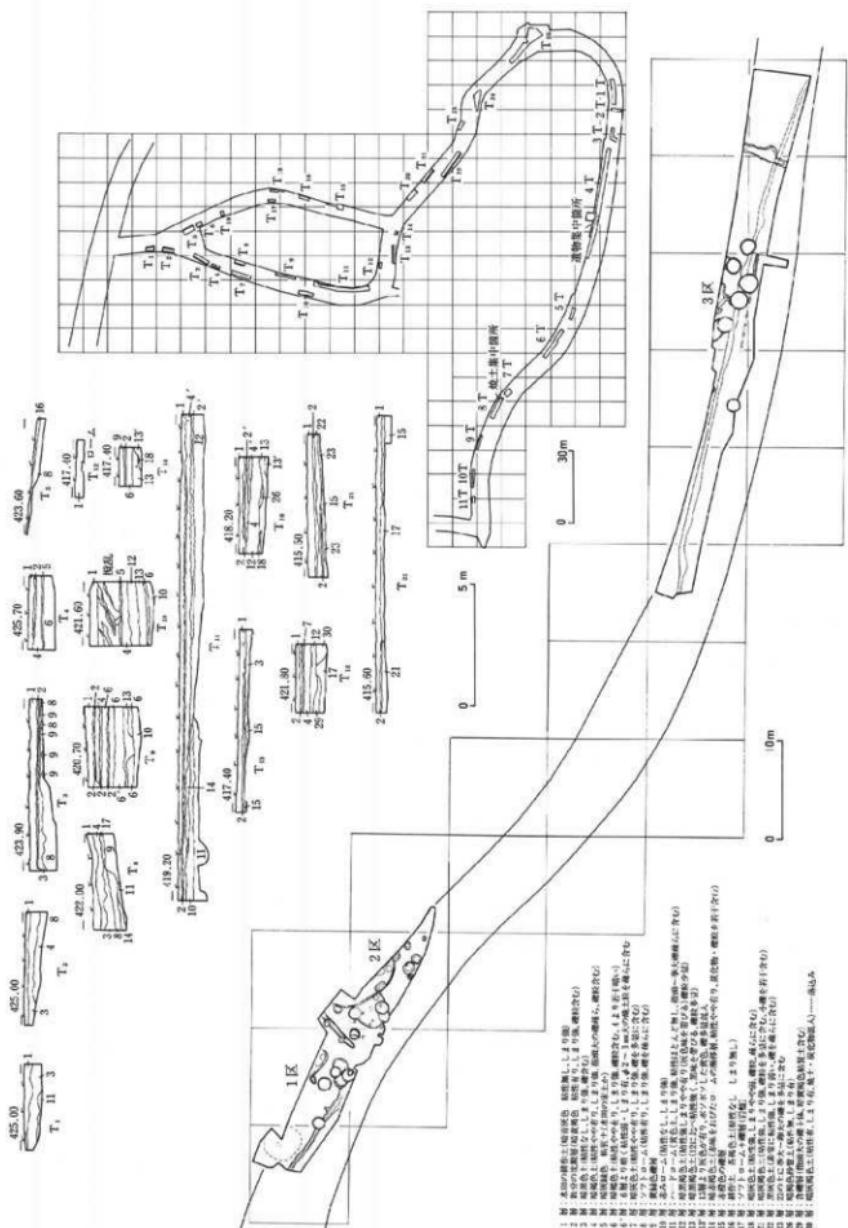
平成13年度工事分は、平成12年12月21日～23日まで試掘調査を実施し、11箇所の試掘溝の内2箇所で焼土の集中や土坑とみられる落ち込みが検出され、また、弥生時代を中心とする土器片が多数出土した（第6図）。

よって新設工事区間のうち2つの地点では工事着工に先立って埋蔵文化財の事前調査が必要であると判断し、その旨を峡中土地改良事務所に伝えた。引き続き発掘調査の具体的な協議に入り、4月以降事前調査を実施し、同年度中に報告書を作成することで合意した。

平成13年4月10日付けで教育委員会と峡中地域振興事務所農務部とで協定書を締結し、同18日より調査を開始した。



第5図 遺跡周辺図 (1/2,000)



第6図 調査区全体及び試掘トレンチ配置図 (1/500・1/200・1/2,000)

## 第2節 調査の方法と経過

農道の拡幅および改良工事の範囲は全長550mを測り、そのうち平成12年度実施の拡幅工事分は約330m、平成13年度実施の新設工事分は約220mを測る。新設工事分の農道は漆川を望む崖際を通ることとなる。

### 試掘調査の成果と調査区の設定（第6図）

平成12年度実施の拡幅工事分については前述した通りであるが、既存の農道が崖際まで続き小谷の開放部付近で終点となる。拡幅範囲に計25箇所の試掘溝（T1～T25）を設定し、重機を用いて掘削しその後手作業で精査した。明確な遺構は検出できなかったが、断面観察から土坑と思われる落ち込みが1基と、遺物としては黒曜石製の剥片や、縄文時代中期の土器片を極少量検出したのみである。よって断面記録等を終了させ、事前調査の必要はないものと判断した。

平成13年度実施の新設工事範囲は、前述した既存の農道の終点から方向を西へ変え崖際を通り別農道へと合流する。新設位置は現存の要壁より外側（谷側）まで含んでおり、崖際の耕作面よりも低い位置に道路ができることがとなり、ほとんどの範囲において切り盛りする計画である。

試掘溝は計11箇所設定した（T1～T11）。結果4T中央よりやや西側で弥生時代土器片の集中箇所ならびに遺構と思われる落ち込みが検出され、また8Tからは焼土と住居址と思われる落ち込みが検出された。よって4T、8Tを中心とする2箇所に事前調査区を設定し、平成13年度の実施を待つこととなった。

耕作との関係から8Tを設定した水田を1区として先行して実施することとなり、7Tの畑を2区、4Tの畑を3区と設定し1区終了後に改めて実施することとなった。1区2区とは隣接しており、3区は約200mの距離をおき東南に位置する。崖線に沿って並ぶ位置となり、3区は六科丘の西に形成された小支谷と漆側とに挟まれる小規模舌状台地の尖端南面となる。調査区が農道の幅より狭いのは、それより南側は崖のためである。

### 調査の経過

1区は、平成13年4月18日に始まり、重機を用いて耕作土を除去した。その厚さは平均して約50cmであり、耕作土を除去するとローム層が現われ遺構の確認できる面となる。遺構確認面は崖際に向かって緩く傾斜している。遺構の検出は手作業で行い、遺物の取り上げ及び測量は手作業による実測と光波測量器を併用して行った。同年4月28日に終了した。

2区及び3区は、平成13年5月24日に先ず3区から表土除去を開始し、引き続き2区の表土除去を実施した。2区・3区も1区同様崖際に位置するが3区では耕作土の厚さは約1m全後を削った。3区では崖線に沿って調査区の約半分が落ち込んでおり、底部に溝底の名残が確認される。土坑群はいずれも覆土に赤土を多分に含んでおり、上面確認では平面形を判別しにくい状態であった。しかし掘削を進めるにつれ、いずれも規模ならびに形状の似通った土坑となつた。同年6月28日、2区の調査終了をもって現場調査を終了した。

調査は1区同様に実施したが、1区終了後に土坑出土土器などを検討した結果、2・3区においても同様な土坑が検出された際には土壤資料を採取し、土坑の性格究明のため自然科学分析を実施することとした（第IV章）。

## 第3節 基本層序（第7図）

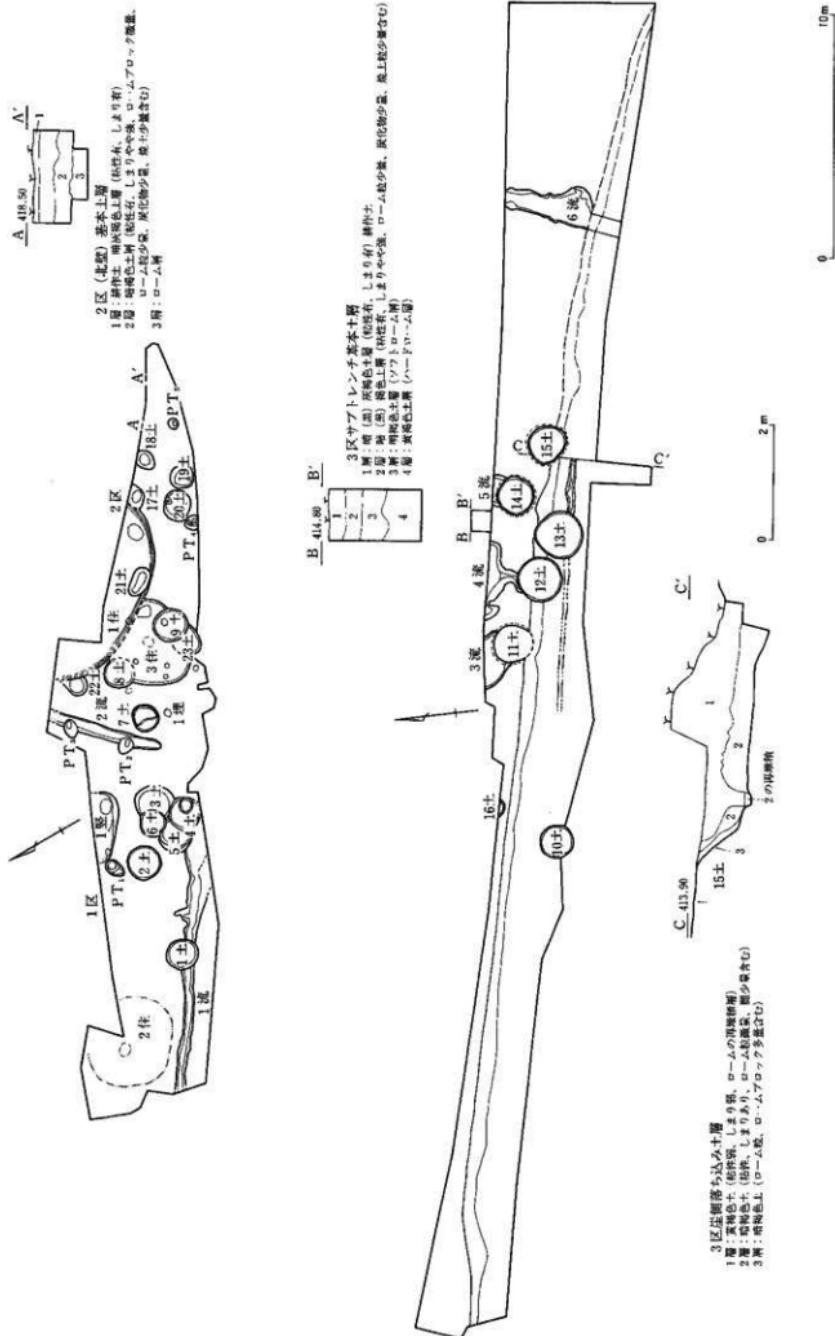
これまでみてきた通り、本調査区周辺は棚田状の耕作地や崖際の要壁などの造成など、土地は削平などの改變を受けており、耕作土や崖際の表土を除去すると直下にローム層が現われる。新居田A遺跡で確認できた黒褐色土を基調とする遺物包含層は検出されない。第2区ならびに第3区にて基本層序を観察し（第7図）、調査区全体を通して概ね以下の様な層序が言える。

第I層 暗灰褐色・黒灰褐色土層部分的にロームの再堆積層を含む（耕作土）

第II層 暗褐色土層ローム粒を含み、部分的に炭化物・焼土粒が混入する（旧耕作土）

第III層 明褐色土層ソフトローム層（遺構確認面）

第IV層 黄褐色土層ハードローム層（下層で礫を含む層が現われる）



第7図 蔵構配置図 (1/80・1/200)

## 第III章 検出された遺構と遺物

### 第1節 概 要

本遺跡で検出された遺構は、竪穴式住居址3軒（縄文時代中期1軒、古墳時代初頭2軒）、竪穴状遺構1基、埋設土器1基、土坑23基、溝状遺構6条、その他ピットなどである。主な時代としては住居址の検出されている縄文時代中期初頭、古墳時代初頭が先ず挙げられ、特記すべき事項として埋設土器、土坑が示す時代が挙げられる。埋設土器は弥生時代前期から中期の段階と考えられ、土坑は主に1区・2区と3区とで約2つの土坑群とみなせられるが、とともに縄文時代晚期終末から弥生時代前期、さらに弥生時代中期初頭までの土器が出土している。

### 第2節 竪穴式住居址

#### 1号住居址

遺構（第8・9図、第1表、図版3・8）

1区・2区にまたがり検出された。北側が調査区域外にかかるが遺存状態は良好である。17号土坑、21号土坑、22号土坑が重複する。

平面形態は、全体のおよそ三分の一を検出したにすぎないため不明だが、南側コーナーの形状から隅丸方形もしくは楕円形を呈するものと推測される。推定規模は長軸で8.0mを越えるものとみられ、壁高は45cmを測る。長軸方向の方位はN-32°-Wを示す。

床面は全面に貼床が施されており、ほぼ平坦で非常に堅緻である。

覆土は8層に分けられ、自然的な堆積を示していた。

壁際沿って周溝が検出された。幅は約25cmで断面形はU字もしくは溝底の平坦なV字を成し、住居址の検出範囲においては全周した。

ピットは1箇所のみ壁際から検出された。規模は長軸64cm×短軸54cm×深さ32cmを測る。覆土は暗黄褐色土を基調とし、粘性・しまりともにある。ピット内の上層において貼床の構築材とみられるロームと暗褐色土のブロックが混入していた。

炉は検出されなかった。掘り方は、南東部と北西部の壁際でみられ、凸凹を成す。一部炭化物を多く含む落ち込みがあり、別造構の可能性がある（8層）。

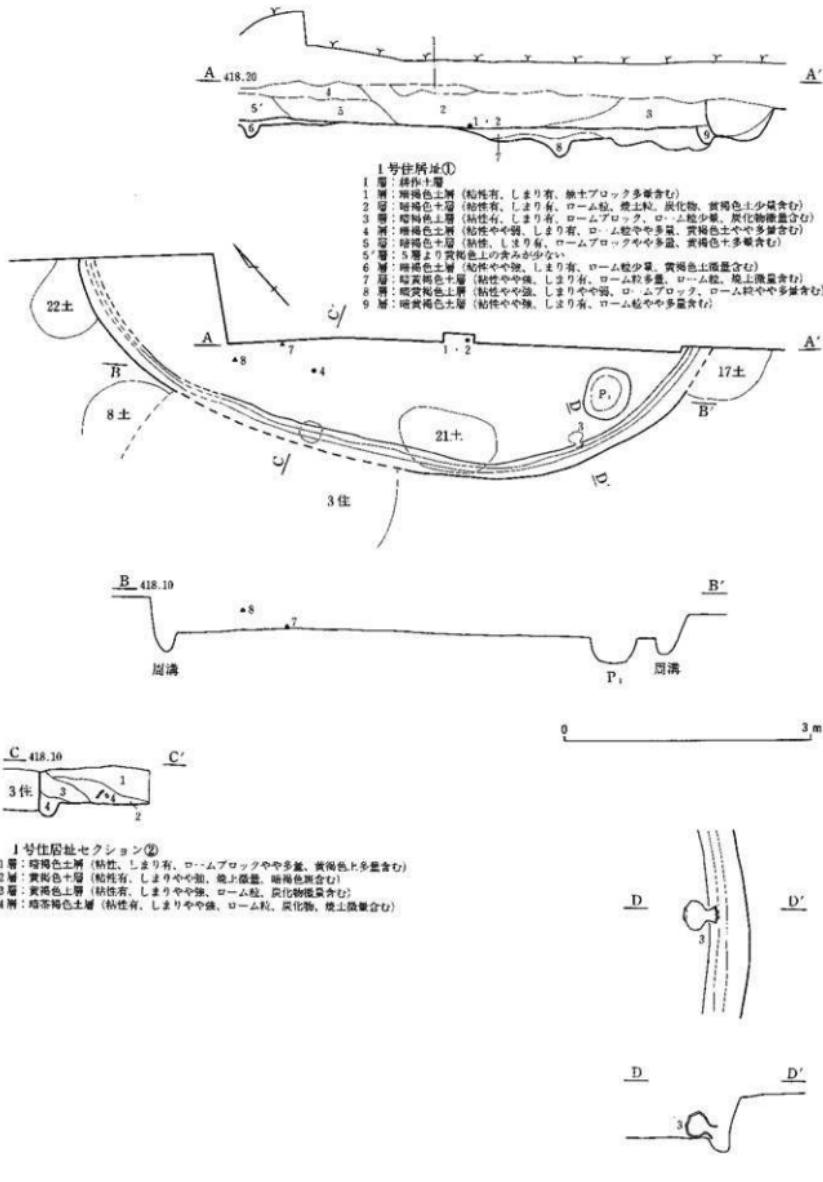
#### 遺物

床面直上から遺物が出土している。

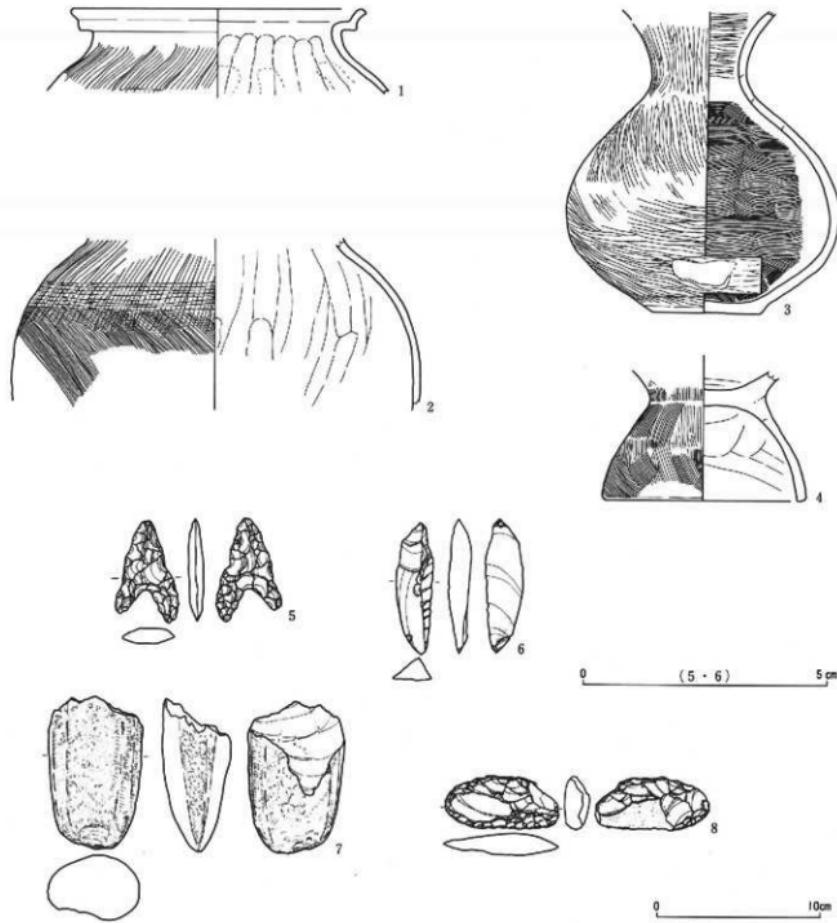
1・2はともに調査区壁のセクション面で確認できたS字状口縁を持つ台付甕の破片である。床面直上から出土し、同一個体とみられる。胴部に斜め方向、さらに肩部に横走するハケ目が施されている。3は口縁部の欠損した壺で、頸部を周溝に向て床面直上で出土した。口縁部以外はほぼ完形で、調整は頸部から肩部上半にかけて縦位のヘラミガキ、胴部下半は斜位から横位のヘラミガキがみとめられる。胴部下半の底部付近に穿孔がみられる。4は台付甕の脚部破片で縦位から斜位のハケ調整がみとめられる。なお、貼床下の掘方からは縄文時代中期の土器片が多数出土している。

石器は4点出土した。5は黒曜石製の無茎石鏽。6は黒曜石製の2次加工のみられる剝片。7は磨製石斧で、基部を欠損し刀部のみである。刃縁に欠損がみとめられるものの摩滅している。傷縁部を中心で敲打痕がみられる。8は横型石匙でつまみ部が欠損している。

時期は出土土器より古墳時代初頭とみられる。



第8図 1号住居址(1) (1/60・1/30)



第9図 1号住居址(2) (1/3・1/1)

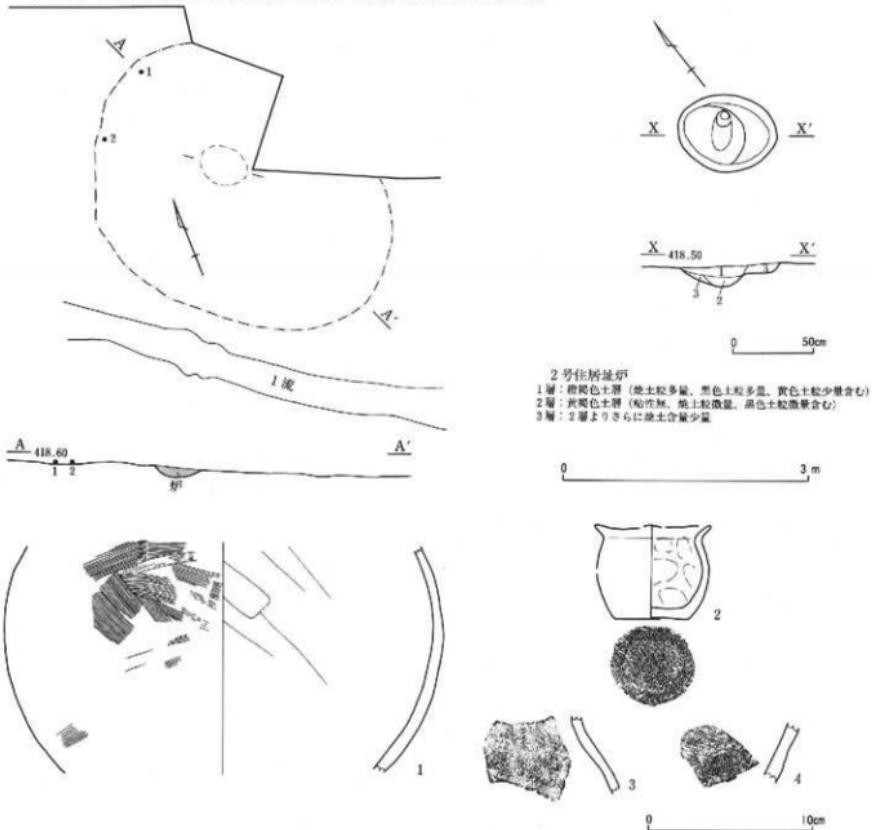
第1表 1号住居址出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調 整	胎土	焼成	色調	備 考
1	S字甕	18.1	—	—	S字状口縁 肩部ナナメハケ	砂粒 (ウンモ)	良	によい橙	古墳初
2	S字甕	—	—	—	ナナメハケ 肩部ヨコハケ	〃	〃	〃	古墳初
3	壺	—	6.8	—	タテヘラミガキ 脚部下半ヨコヘラミガキ	砂粒	〃	黄褐色	発生末～古墳初
4	台付甕	—	11.9	—	ナナメハケ	砂粒 (ウンモ)	〃	橙	発生末～古墳初
番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備 考	
5	1号住居	石鉋	2.1	1.3	0.3	0.6	黒曜石		
6	〃	2次加工剝片	2.8	0.7	4.1	0.8	黒曜石		
7	〃	磨製石斧	9.5	5.7	4.1	309.2	麥賀安山岩		
8	〃	石匙	3.3	7.1	1.4	31.6	珪質頁岩		

2号住居址（第10図、第2表、図版1・8）

1区西端部に位置し、遺構の北東部の一部が調査区外へと伸びる。貼床が検出されたのみで平面形態および壁の立ち上がりも不明である。貼床の遺存状態から楕円形を成していたと推測され、遺存規模は長軸3.9mである。炉は地床炉で調査区壁付近で1基検出された。主軸はN-55°-Eで住居址ともほぼ一致しているとみられる。

遺物は計10点出土している。1は壺の胴部破片。横位から斜位のハケ目がみられる。2は壺の完形品。口縁部がゆるやかな波状を成す。時期は出土遺物から古墳時代初頭とみられる。



第10図 2号住居址 (1/60・1/30・1/3)

第2表 2号住居址出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調 整	胎土	焼成	色 調	備 考
1	壺	—	—	—	ヨコハケ ナナメハケ	砂粒	良	にぼい黄褐色	古墳初
2	壺	7.1	4.5	5.9	口縁部波状 底部木葉痕	白色粒	〃	明赤褐色	〃
3	壺	—	—	—	ヘラミガキ	密	〃	明赤褐色	〃
4	壺	—	—	—	ナナメハケ	砂粒	〃	明赤褐色	〃

### 3号住居址（第11・12図、図版3・4・8・10）

#### 遺構

1区・2区の中央や東寄りに位置し、1号住居址、8号土坑、9号土坑、23号土坑と重複し、これらに切らされている。

平面形態は他遺構との重複により確認し得ない部分もあるが、ほぼ卵形を呈すると推定される。規模は副軸で約3.2mを測り、長軸では1号住居址の貼床下の状況などから推測して3.8m前後とみられる。

覆土は6層に分けられ、暗茶褐色を基調とする。住居址中央よりやや西側で床面より約15cm上位に8~15cm大の礫が多量に含まれていた。

床面はほぼ平坦であり、壁高は北西側で約40~45cm、南東側で約20~25cmを測り若干内湾しながら立ち上がる。

ピットは8基検出された。うち2基は住居址外にある。それぞれの規模は次の通りである。 $P_1$ ：(長軸)22cm×(短軸)18cm×(深さ)42cm  $P_2$ ：24cm×21cm×32cm  $P_3$ ：27cm×25cm×41cm  $P_4$ ：30cm×26cm×28cm  $P_5$ ：22cm×19cm×16cm  $P_6$ ：62cm×38cm×10cm  $P_7$ ：25cm×22cm×27cm  $P_8$ ：27cm×25cm×15cm。 $P_1$ から $P_4$ は遺物(3・4)がピット内に落ち込むような出土状況を示している。 $P_1$ ・ $P_2$ ・ $P_3$ ・ $P_4$ は配列は不整形であるものの主柱穴とみられる。 $P_7$ ・ $P_8$ は住居址外に存在し、住居壁から10cm、20cmの距離にある。

炉は埋甕炉で、住居址のほぼ中央で検出された。遺存状態は良好である。掘方の平面形は長軸42cm×短軸40cmのほぼ正円形を呈し、床面からの深さ20cmを測り、西側でやや外反しながらゆるやかに立ち上がる掘方に埋甕をしている。炉体土器の外側及び内側下層で焼土が多く確認された。

#### 遺物

1は炉体土器。深鉢の胴部破片で口縁部と底部を欠損する。胴まわりは1周する。地文は撚糸文で胴部懸垂文は渦巻文からクランク状になり垂下する。胎土には白色粒を多く含む。縄文時代中期初頭。

2・3はピット1に落ち込む形で出土している。2~4は浅鉢の口縁部破片。2は口唇部が肥厚し、隆帯がめぐり渦巻文、三角文を成す。口唇部の隆帯には横位にRL縄文が施されている。口唇部下には竹管状工具による刻目がめぐる。以下無文。3と4は同一個体とみられる。RL縄文を横方向に施文した隆帯が口縁部を横位に梢円区画している。胴部にかけては無文。鉢の口縁部破片、5は床直上の覆土、5層から出土した。口縁部から胴部破片で波状口縁を持つ。内面にはコゲが付着している。胎土には金雲母を多く含む。

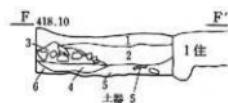
6~9は底部破片。6は胴部最下部の底部付近まで懸垂文による縦位区画の中を結節縄文により充填されている。底部外面に炭化物の付着がみとめられる。7も同様で懸垂文による縦位区画内を結節縄文により充填されている。胎土に金雲母を多く含む。8は内面にコゲ状炭化物の付着がみとめられる。白色粒、金雲母を多く含む。10は器表の磨耗が激しいが沈線文が垂下し、RL縄文が縱方向に充填されている。11は地文に縄文を充填し沈線が垂下する。12は地文に縄文を充填後沈線を3条垂下させている。

石器は2点出土している。13は黒曜石製で両側縁部に刃部を作り出している。搔器か。14は横刃形石器。

時期は出土遺物から縄文時代中期初頭五領ヶ台II式最終末に位置付けられる。

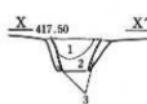
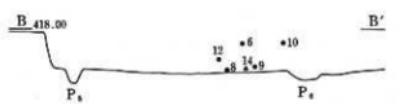
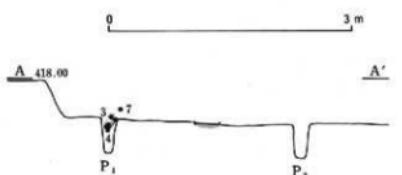
第3表 3号住居址出土遺物観察表

番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
13	3号住居	搔器	1.3	1.5	0.5	1.1	黒曜石
14	3号住居	横刃形石器	4.4	6.3	1.2	26.1	砂岩



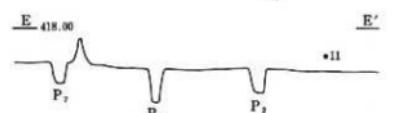
### 3号住居址

- 1層：暗茶褐色土層（粘性有、しまり強、ローム粒少量、炭化物、燒土粒微量含む）  
 2層：暗茶褐色土層（粘性有、しまりや中強、ローム粒少量、燒土粒、炭化物微量含む）  
 3層：暗茶褐色土層（粘性有、しまり強、φ8~15cm粒多量含む）  
 4層：暗茶褐色土層（粘性有、しまり有、燒土粒、炭化物微量含む）  
 5層：暗茶褐色土層（粘性、しまり強、ローム粒少量、炭化物微量含む）  
 6層：暗褐色土層（粘性有、しまりやや強、ローム粒微量含む、炭化物、燒土粒微量含む）

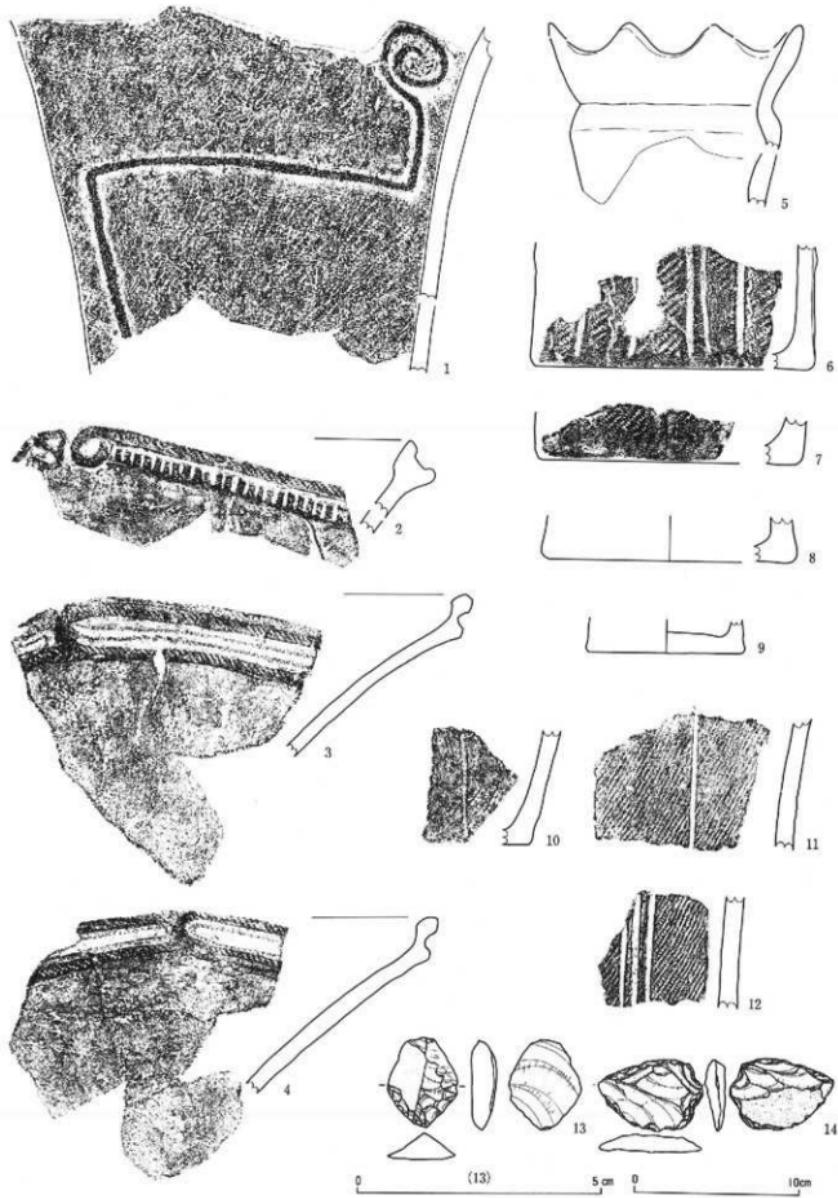


0 50cm

- 3号住居址  
 1層：褐色土層（粘性有、しまりやや強、ロームブロック・粒やや多量、炭化物、燒土粒微量含む）  
 2層：暗褐色土層（粘性有、しまりやや強、ロームブロック・粒微量、炭化物微量、燒土粒多量含む）  
 3層：暗褐色土層（粘性有、しまりやや強、ロームブロック・粒微量、炭化物微量、燒土粒多量含む）



第11図 3号住居址(1) (1/60・1/30)



第12圖 3号住居址(2) (1/3・1/1)

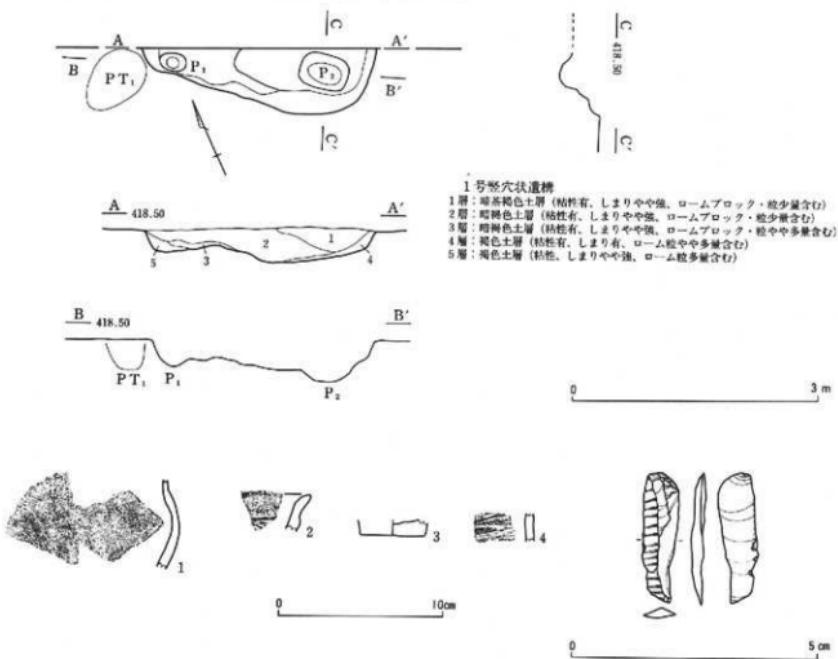
### 第3節 壇穴状遺構

#### 1号壇穴状遺構 (第13図、第4表、図版2・8・10)

1区・2区のはば中央、ピット1の東側に位置する。調査区北壁にかかるて検出された遺構である。一部のみの検出であるため平面形態は不明であるが、コーナーが2箇所確認できる。規模は検出された最長部分で2.9mを測る。覆土は暗褐色土を基調とし、5層に分けられる。床は凹凸があり、各コーナーに浅いピット状の落ち込みが確認される。

遺物は計11点出土した。1は浅鉢の断部破片で口縁部へ向け立ち上がる。2は浅鉢の口縁部破片である。外反する口縁部直下に細密条痕文がみられる。4は浅鉢の断片で浮線網状文がみとめられる。石器は計1点、黒曜石製の剝片が出土している。

時期は出土遺物から縄文時代晚期終末の所産と考えられる。



第13図 1号壇穴状遺構 (1/60・1/3・1/1)

第4表 1号壇穴状遺構出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調 整		胎土	焼成	色 調	備 考
					ケズリ					
1	浅鉢	—	—	—			白色粒	良	橙	縄文晩期末
2	浅鉢	—	—	—	細密条痕文		白色粒	〃	赤褐色	〃
3	不明	—	4.0	—	底部外周をケズリ		白色粒	〃	にふい黄褐色	〃
4	浅鉢	—	—	—	浮線網状文		砂粒	〃	〃	〃
番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	胎土	焼成	色調	備考
5	壇穴状	2次加工剝片	2.7	0.7	0.2	0.4	白色粒	良	橙	縄文晩期末
							白色粒	〃	赤褐色	〃
							砂粒	〃	にふい黄褐色	〃
							砂粒	〃	〃	〃

## 第4節 埋設土器

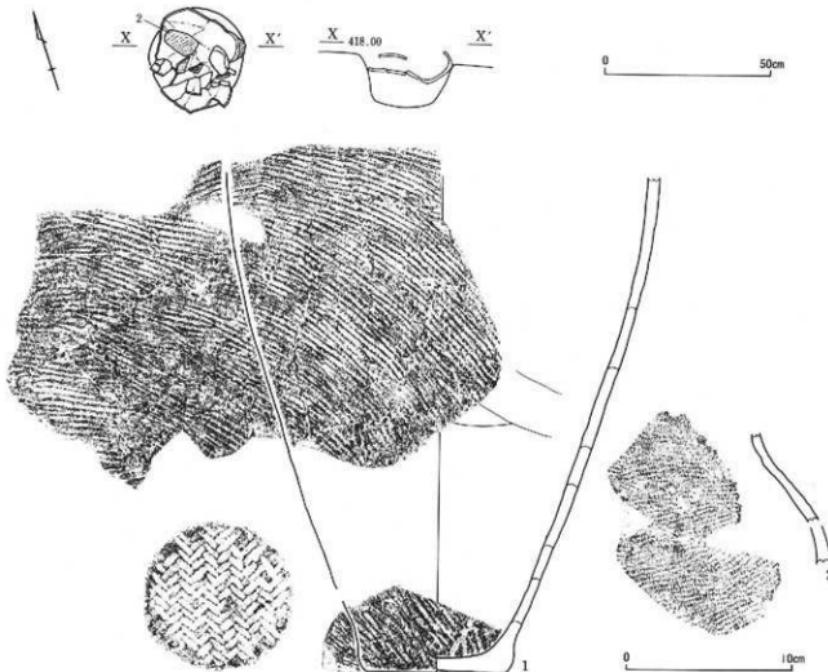
1号埋設土器（第14図、第5表、図版2・9）

1区・2区のはば中央、7号土坑の南に位置する。掘り方の規模は直径約37cmの正円形を呈す。中からは2個体の土器片が出土した。上部は耕作等により擾乱を受けている。

1は掘り方に對し浮いており、底部はやや斜めに傾いている。下側で潰れ内面を上に向いている器壁は遺存し、反対側は擾乱により滅失したと思われる。しかし、下側の破片より若干上位で2の土器片が器面を上にして出土し、蓋としての一組の様相が窺える。また、礫も伴っていた。

1は網代圧痕を有する底部を持ち、比較的急角度で直線的に立ち上がる。この部分では器種は深鉢と思われるが、その後ゆるやかに内湾するため、広口壺の可能性もある。器面には底部まで全面に条痕文が施されている。施文具は貝殻ではなく、先端部の丸い棒状工具を束ねたものとみられる。2は壺の肩部破片で全面に縄文が充填されている。

時期は弥生時代前期末から中期初頭か。



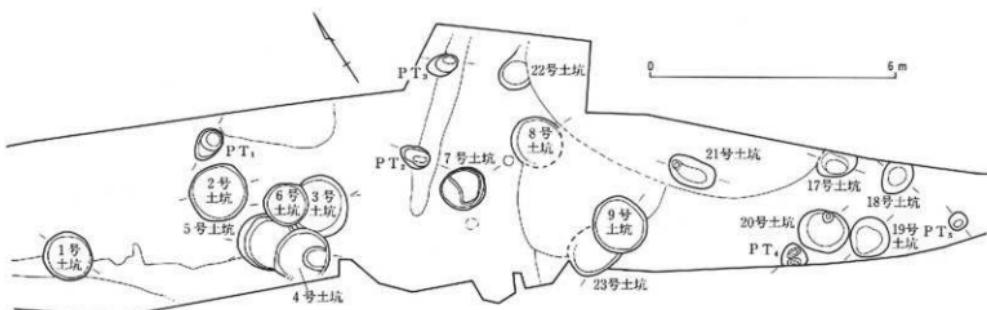
第14図 1号埋設土器 (1/15・1/3)

第5表 1号埋設土器出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調 整	胎土	焼成	色 調	備 考
1	広口壺 又は深鉢	—	8.6	—	棒状工具を束ねた施文具による 条痕文 底部網代圧痕	白色粒	良	明褐色	弥生前期～ 中期初
2	壺	—	—	—	LR縄文	砂粒	〃	明褐色	〃

## 第5節 土坑・ピット・流路

### 1区・2区

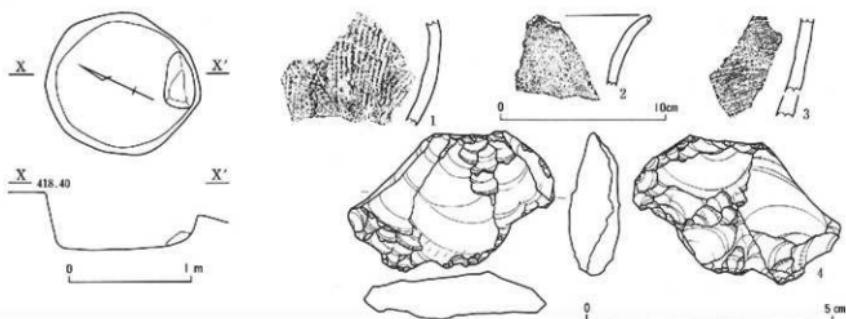


第15図 1・2区土坑・ピット・流路 (1/120)

#### 1号土坑 (第16図、第6表、図版2・9・10)

1区・2区の西側に位置し1号流路と重複する。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸128cm×短軸116cm、下端で長軸117cm×短軸101cmを測る。深さは47cmで、壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示し、南東の壁際に46cm大の礫が検出された。覆土は暗褐色土を基調とする。

遺物は3点出土した。全て図示する。1は壺の腹部破片。2は無文の口縁部破片で小突起を有する。3は斜位に細密条痕文が施されている。縄文時代晚期終末の所産か。



第16図 1区1号土坑 (1/40・1/3・1/1)

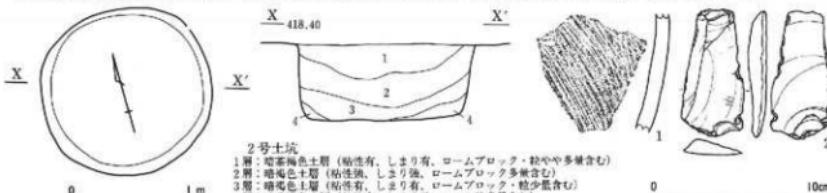
第6表 1号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調 整		胎土	焼成	色 調	備 考
					細密条痕文	砂粒				
1	壺	—	—	—	細密条痕文	砂粒	良	明黄褐色	縄文晩期末	
2	深鉢	—	—	—	口縁部小突起 無文	白色粒	〃	褐色	〃	
3	深鉢	—	—	—	斜位細密条痕文 (ヘラ状工具か)	砂粒	〃	褐色	〃	
番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材			
4	1号土坑	搔器	3.1	4.2	1.1	9.1	黒曜石			

## 2号土坑 (第17図、第7表、図版2・9・10)

1区・2区の中央西側、6号土坑の北西に位置する。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸139cm×短軸139cm、下端で長軸122cm×短軸122cmを測る。深さは64cmで、壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。覆土は暗褐色土を基調とし、4層に分けられ1・2層はロームブロックを含み、炭化物がみとめられる。

遺物は42点出土し、ほとんどが細片で縄文時代中期の土器片も出土している。1は鉢の胴部下半でヘラ状工具による細密条痕文が施されている。縄文時代晚期終末の所産。石器は剥片が1点壁際から出土している。



第17図 1区2号土坑 (1/40・1/3)

第7表 2号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調整		胎土	焼成	色調	備考
					細密条痕文(ヘラ状工具か)	砂粒				
1	深鉢	—	—	—	—	良	澄	—	—	縄文晚期
番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	—	—	—
2	2号土坑	2次加工剥片	1.8	0.9	0.4	0.4	黒曜石	—	—	—

## 3号土坑 (第18・19図、第8表、図版2・9・10)

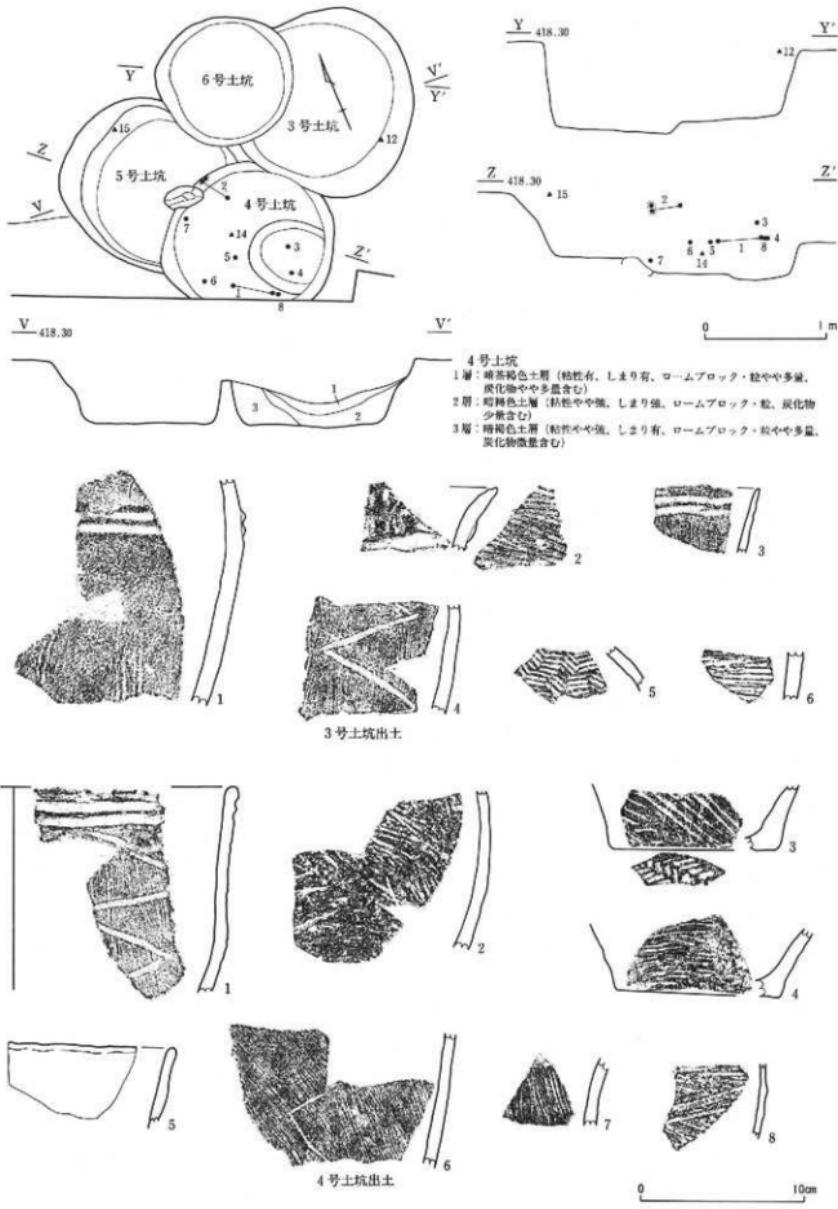
1区・2区の中央西側に位置し、4号土坑、6号土坑と重複する。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸156cm×短軸152cm、下端で長軸128cm×短軸126cmを測る。深さは54cmで、壁はやや内湾しながら急角度で立ち上がり、東側ではややテラス状を示す。底はほぼフラットで鍋底状の断面形を示す。覆土は炭化物を含む暗褐色土を基調とし、4層に分けられる。

遺物は土器片80点、石器2点が出土している。土器片は縄文時代中期が少数とその他縄文時代晚期終末から弥生時代前期、さらに中期までがみとめられる。1は鉢の胴部に突帯がめぐり、下半に細密条痕文が施されている。3は口縁部に小突起を有し、浅い弦線が2条めぐる。胴部にかけて縦位の細密条痕文が施されている。4は胴部破片で細密条痕文の地文に稻妻状の文様が施されている。以上縄文時代晚期終末式に属する。2は広口壺の口縁部破片で押圧文の刻まれた低い貼付突帯がめぐり、内面は横位から斜位に条痕文が施される。弥生時代前期末に属するか。5は壺の肩部破片で羽状の条痕文がめぐる。6は横位の条痕文が施されている。5・6はともに棒状工具を束ねたものによる施文とみられる。弥生時代中期初頭。石器は5点で、12は側縁部に両面からの調整がみられる打製石斧の基部で、刃部を欠損している。13は磨製石斧の基部で同じく刃部を欠損している。

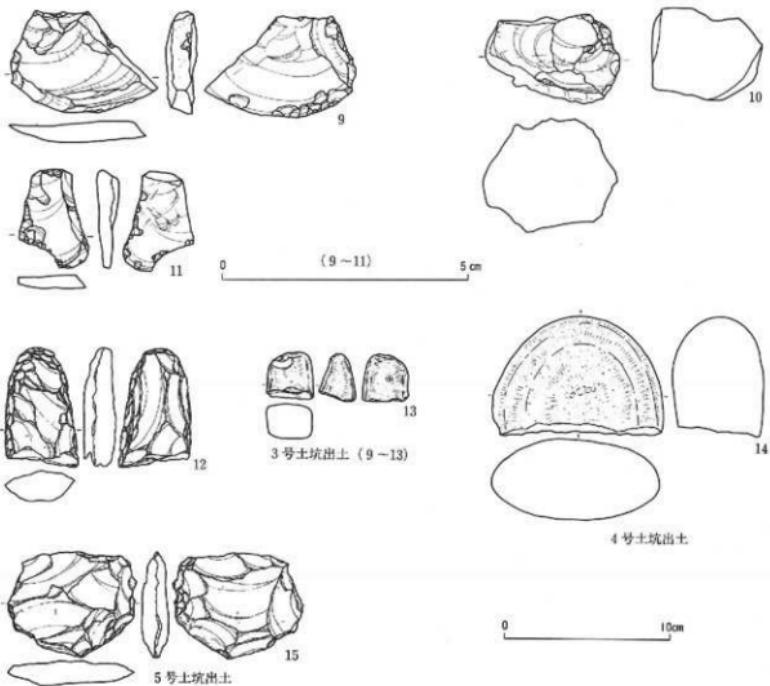
## 4号土坑 (第18・19図、第8表、図版2・9・10)

1区・2区の中央西側に位置し、3号土坑、5号土坑と重複し、南端部が調査区外へ伸びる。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸144cm×短軸132cm、下端で長軸120cm×短軸114cmを測る。深さは25cmで、壁はやや急角度で立ち上がり、5号土坑と重複する箇所に32cm大の標がみられる。底は東側で一段落ち込む。覆土は炭化物を含む暗褐色土を基調とする。

遺物は土器片が14点、石器が1点出土した。1は深鉢の口縁部から肩部の破片で口縁部に2条の浮沈線がめぐり地文に縦位の細密条痕文が施される。口縁部下より稻妻状の文様がみられる。6は斜位の細密条痕文が施され、くずれかけた稻妻状の文様がみられる。5は口縁部破片で無文。8は横位と斜位の細密条痕文が施されている。いずれもヘラ状工具による施文とみられ、縄文時代晚期終末水I式の所産である。3・4は底部破片でヘラ状工具による条痕文が施されている。3は底面に網代压痕がみられる。編み方は不明。2は球形の胴部を持つ壺の破



第18図 1区3～6号土坑(1) (1/40・1/3)



第19図 1区3～6号土坑(2)(1/3・1/1)

第8表 3～5号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調 整		胎土	焼成	色 調	備 考
					突帯	胸部下半に細密条痕文				
3土1	深鉢	—	—	—	突帯	胸部下半に細密条痕文	白色粒	良	褐色	縄文晩期末
3土2	広口壺	—	—	—	貼付突帯に押圧文	白色粒	〃	淡い黄橙	弥生前期末か	
3土3	深鉢	—	—	—	口縁部小突起	浅い弦線 細密条痕文	密	〃	暗褐色	縄文晩期末
3土4	深鉢	—	—	—	細密条痕文	粗妻文	砂粒	〃	にほい黄褐色	〃
3土5	壺	—	—	—	羽状条痕文(棒状工具)	白色粒	〃	黄褐色	弥生中期初	
3土6	深鉢	—	—	—	横位条痕文(棒状工具)	白色粒	〃	褐色	〃	
4土1	深鉢	27.6	—	—	突帯 細密条痕文 福妻文	白色粒	〃	にほい黄褐色	縄文晩期末	
4土2	壺	—	—	—	斜位条痕文(△状工具)	砂粒	〃	にほい赤褐色	縄文晩期最終末	
4土3	深鉢	—	9.9	—	条痕文 底部側面压痕	砂粒	〃	にほい赤褐色	縄文晩期最終末	
4土4	深鉢	—	9.9	—	条痕文 底部不明压痕	白色粒	〃	褐灰色	縄文晩期最終末	
4土5	深鉢	—	—	—	口縁部無文	砂粒	〃	にほい黄褐色	縄文晩期末	
4土6	深鉢	—	—	—	細密条痕文 粗妻文	白色粒	〃	黄褐色	縄文晩期末	
4土7	深鉢	—	—	—	条痕文	密	〃	にほい黄褐色	縄文晩期最終末	
4土8	深鉢	—	—	—	条痕文	白色粒	〃	黄褐色	縄文晩期末	
番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材			
9	3号土坑	2次加工剥片	2.1	3.1	0.5	3.4	黒曜石			
10	3号土坑	剥片(被熱か)	2.3	2.7	1.8	8.1	黒曜石			
11	3号土坑	2次加工剥片	2.1	1.9	0.3	1.1	黒曜石			
12	3号土坑	打製石斧	7.4	4.3	1.9	73.8	頁岩			
13	3号土坑	磨製石斧	3.1	2.8	2.2	20.4	麥賀安山岩			
14	4号土坑	磨石	7.4	10.4	5.1	576.4	安山岩			
15	5号土坑	擦器	6.6	7.7	1.6	95.7	砂質頁岩			

片か。荒い条痕文がみとめられる。7は底部付近の破片で条痕文がみとめられる。以上縄文時代晩期最終末の所産とみられる。石器は1点のみ出土。14は磨石で一部欠損している。中央部に凹みがあり台石や凹石の性格を併せ持ったとみられる。

#### 5号土坑 (第18・19図、図版2・10)

1区・2区の中央西側に位置し、4号土坑、6号土坑、1号流路と重複する。平面形はほぼ正円形を呈するところ、規模は上端で長軸148cm×短軸140cm、下端で長軸118cm×短軸116cmを測る。深さは54cmで、壁はやや急角度で立ち上がり外反する。4号土坑と重複する箇所に32cm大の礫がみられる。底はほぼフラットである。覆土は炭化物を含む暗褐色土を基調とする。

遺物は石器が1点出土した。側縁部に加工が加えられており、搔器とみられる。

#### 6号土坑 (第18・19図、図版2・10)

1区・2区の中央西側に位置し、3号土坑、5号土坑と重複する。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸112cm×短軸106cm、下端で長軸96cm×短軸90cmを測る。深さは70cmで、壁はやや急角度で立ち上がり、断面形態は鍋底状を示す。覆土は炭化物を含む暗褐色土を基調とする。遺物は検出されなかった。

#### 7号土坑 (第20図、第9表、図版2・9)

1区・2区のはば中央に位置し、1号埋設土器に隣接する。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸112cm×短軸104cm、下端で長軸104cm×短軸98cmを測る。深さは58cmで、壁は急角度で立ち上がり筒状の断面形態を示す。底に東側を中心に周溝状の凹みがみとめられた。覆土は焼土を微量に含む暗茶褐色土を基調とし、4層に分けられる。

遺物は19点出土した。4点を図示するがその他はすべて細片である。1は口縁部破片。口唇部に押圧文をもち以下細密条痕文が施されている。縄文時代晩期終末式の系統をひくものと思われるが弥生時代前期の所産か。2は広口壺の肩部破片。粗い櫛歯状工具による横位の条痕文が施されている。弥生時代前期の所産。3は斜位の条痕文が施されている。4は土坑内の中央、1層内から検出された底部破片で底部周辺部にケズリ調整がみとめられる。縄文時代晩期終末に属する。図示し得なかつたが、うっすらと条痕文の確認される細片に押圧状の痕跡がみとめられるものも検出されている。



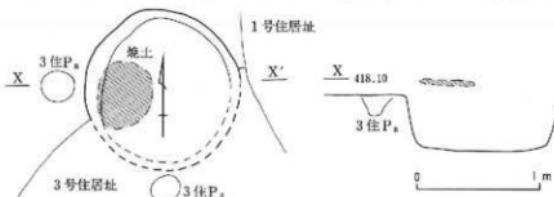
第20図 1区7号土坑 (1/40)

第9表 7号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調 整	胎土	焼成	色 調	備 考
1	深鉢	—	—	—	口唇部押圧痕 細密条痕文	砂粒	良	暗褐色	弥生前期
2	広口壺	—	—	—	粗い櫛歯状工具による横位条痕文	砂粒	〃	褐色	弥生前期末
3	深鉢	—	—	—	斜位条痕文	白色粒	〃	黄褐色	縄文晩期末
4	深鉢	—	10.0	—	ケズリ	白色粒	〃	にぶい赤褐色	縄文晩期末

### 8号土坑 (第21図、図版2)

1区・2区のはば中央に位置し、南側半分を3号住居と重複する。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸134cm、下端で長軸推定120cm×短軸114cmを測る。深さは48cmで、壁はやや急角度で立ち上がり、断面形態は



第21図 1区 8号土坑 (1/40)

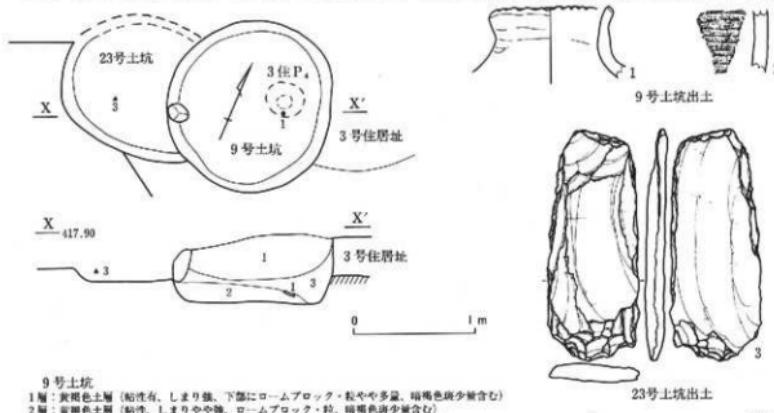
### 9号土坑 (第22図、第10表、図版4・9)

1区・2区の中央やや東側に位置し3号住居址と23号土坑とに重複する。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸141cm×短軸132cm、下端で長軸128cm×短軸120cmを測る。深さは54cmで、壁は急角度で立ち上がりや内湾する。若干袋状土坑の底部付近の断面形を示し、南西の壁際に28cm大の礫が検出された。また、底部下より3号住居址のビットが検出された。覆土は黄褐色土を基調とし、底部付近には暗褐色土層が確認される。3層に分けられる。本土坑の覆土を自然科学分析用資料として採取している (第IV章参照)。

遺物は土器片2点が出土した。1は2層と3層の間から検出された壺の口縁部から肩部の破片。口唇部に棒状工具による刻目文がめぐらしく、頸部に櫛状压痕とみられる痕跡がみとめられる。弥生時代中期初頭か。

### 23号土坑 (第22図、第10表、図版4・10)

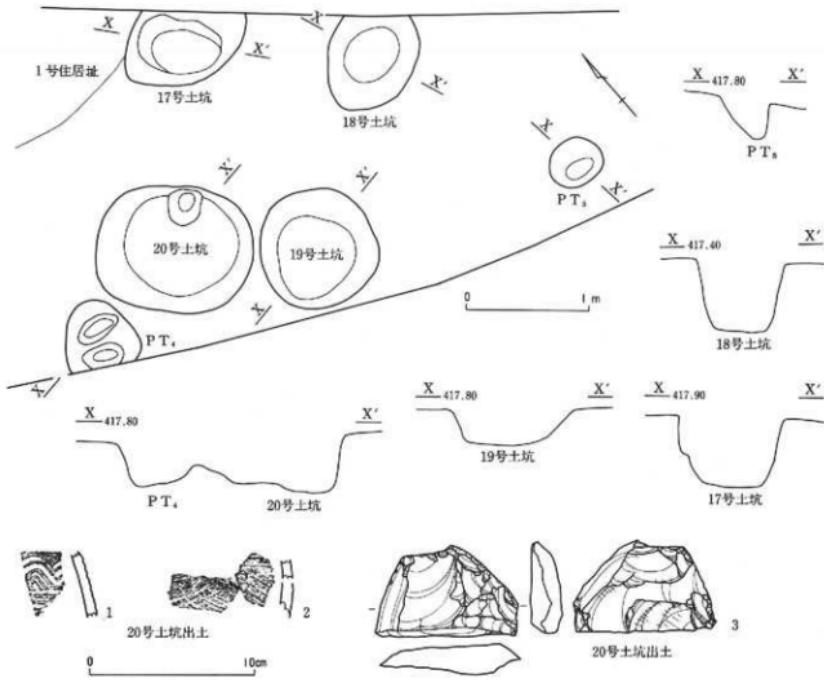
1区・2区のはば中央東側に位置し3号住居址と9号土坑とに重複する。底部が3号住居址とフラットであり、



第22図 2区 9号・23号土坑 (1/40・1/3)

第10表 9・23号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調査		胎土	焼成	色調	備考
					壁部棒状工具による刻目文	白色粒				
1	壺	7.5	—	—	口唇部棒状工具による刻目文	白色粒	良	赤褐色	弥生中期初頭	
2	深鉢	—	—	—	横位条痕	砂粒	〃	黒褐色	〃	
番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材			
3	23号土坑	打製石斧	14.3	5.5	1.1	108.2	ホルンフェルス			



第23図 1・2区17号～20号土坑、ピット4・5 (1/40・1/3)

平面形は不明である。南側で断面形皿状を示す立ち上がりが確認できるのみである。遺物は石器が1点出土している。1は短冊形打製石斧で基部および側縁部に調整がみられ、刃部は両面から加工されている。

#### 17号土坑 (第23図)

1区・2区の東側、1号住居址に重複する。平面形は不整台形で下端は梢円形を呈する。規模は上端で長軸92cm、下端で長軸55cm×短軸36cmを測る。深さは54cmで、壁は急角度で立ち上がり西側にテラスを持つ。覆土は暗褐色土を基調とし、ロームブロック・ローム粒、赤色粒を少量含む。下層は3cm～5cm大ロームブロックを多量に含む。

#### 18号土坑 (第23図)

1区・2区の東側、17号土坑の南東に位置する。平面形は梢円形を呈する。規模は上端で長軸94cm×短軸72cm、下端で長軸50cm×短軸38cmを測る。深さは56cmで、壁は急角度で立ち上がり断面形鍋底状を示す。覆土は暗褐色土を基調とする単層で、しまりがありロームブロック・ローム粒を少量含む。遺物は5点出土している。その全てが細片で条痕文系土器片を主とする。

#### 19号土坑 (第23図)

1区・2区の東側、20号土坑の南東に位置する。平面形は不整円形を呈する。規模は上端で長軸99cm×短軸98cm、下端で長軸65cm×短軸65cmを測る。深さは30cmで、断面形鍋底状を示すが東側は緩やかに立ち上がる。覆土は暗褐色土を基調とする単層で、しまりがありロームブロック・ローム粒を少量含む。炭化物も微量であるがみとめられる。

#### 20号土坑 (第23図、第11表、図版9・10)

1区・2区の東側、ピット4の東側に位置する。平面形は不整方形、下端で梢円形を呈する。規模は上端で長

軸126×短軸102cm、下端で長軸92cm×短軸85cmを測る。深さは50cmで、底部は凹凸を成し東側でやや急角度で立ち上がる。覆土は暗褐色土を基調とする。

遺物は土器片9点が出土した。1は波状の条痕文がめぐる。弥生時代中期初頭の所産か。2はヘラ状工具による斜位の条痕文が施されている。

第11表 20号土坑出土遺物観察表

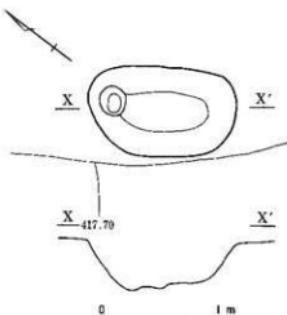
番号	器種	口径	底径	器高	調 整	胎土	焼成	色 調	備 考
1	壺	—	—	—	波状条痕文	砂粒	良	褐色	弥生中期
2	壺	—	—	—	条痕文(ヘラ状工具による)	白色粒	"	にぶい黄褐色	"
番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	胎土	色調	備考
3	20号土坑	2次加工剥片	1.9	2.9	0.6	3.3	黒曜石		

### 21号土坑(第24図)

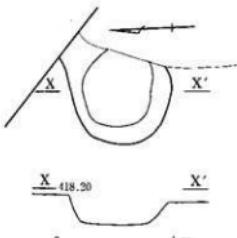
1区・2区の東側に位置し、1号住居址と重複する。規模は上端で長軸122×短軸76cm、下端で長軸72cm×短軸36cmを測る。深さは44cmで、底部は凹凸を成し緩やかに立ち上がる。覆土は暗褐色土を基調とし、炭化物・焼土粒を多量に含む。

### 22号土坑(第25図)

1区・2区のほぼ中央に位置し、1号住居址と重複する。規模は上端で短軸82cm、下端で短軸54cmを測る。深さは24cmで、壁は緩やかに立ち上がり、鍋底状の断面形態を示す。覆土は暗茶褐色土を基調とし、焼土粒を微量に含む。



第24図 2区21号土坑 (1/40)



第25図 1区22号土坑 (1/40)

### ピット1(第26図)

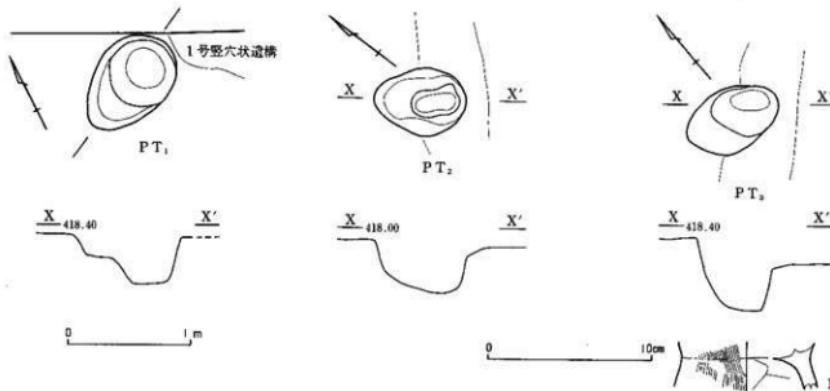
1区・2区の西側、1号竪穴状遺構の西に位置し、平面形は卵形を呈する。規模は上端で長軸90cm×短軸62cm、下端は直径30cmの正円形を呈する。深さは38cmで、壁はやや急角度で立ち上がり南西側で段状を成す。覆土は暗茶褐色土を基調とし、焼土を少量含む。また、南西側にロームブロック・ローム粒がまとまって確認される。遺物は10点出土し、そのほとんどが縄文時代中期に属するものである。いずれも図示し得ない。

### ピット2(第26図)

1区・2区のほぼ中央2号流路と重複する。平面形は不整橢円形を呈する。規模は上端で長軸75cm×短軸56cm、下端で長軸32cm×短軸12cmを測る。深さは40cmで、壁はやや急角度で立ち上がり断面形鍋底状を示すが北西側でややゆるやかに立ち上がる。覆土は暗茶褐色土を基調とする単層で、粘性・しまりともにありローム粒を多量に含む。

### ピット 3 (第26図、第12表、図版 9)

1区・2区のはば中央2号流路と重複する。平面形は不整橢円形を呈する。規模は上端で長軸80cm×短軸50cm、下端で長軸30cm×短軸16cmを測る。深さは58cmで、壁は急角度で立ち上がり断面形鍋底状を示すが北西側でややゆるやかに立ち上がる。覆土は暗茶褐色土を基調とし、粘性・しまりともにあり中層でロームブロック・ローム粒をやや多量に含む。また焼土を微量に含む。遺物は台付甕の脚部破片。縦位のハケ調整がみられる。



第26図 1区ピット1~3 (1/40・1/3)

第12表 3号ピット出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調 整	胎土	焼成	色 調	備 考
1	台付甕	—	—	—	ハケ	密	良	明褐色	弥生末～古墳初

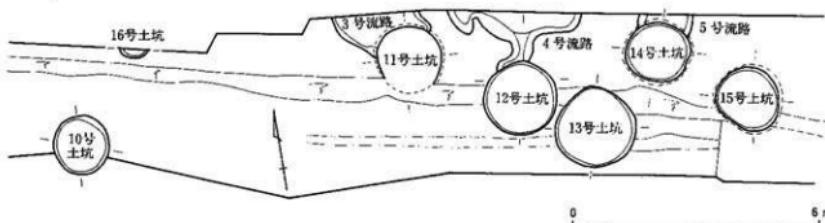
### 1号流路 (第15図)

1区南側に位置し、幅は40cmから100cm以上を測る。深さは約20cm程であり、約11m確認された。

### 2号流路 (第15図)

1区・2区の中央に位置し、調査区北東側壁から約4.8m確認され収束する。幅は約50cm、深さ約20cmを測る。

### 3区



第27図 3区土坑・流路 (1/120)

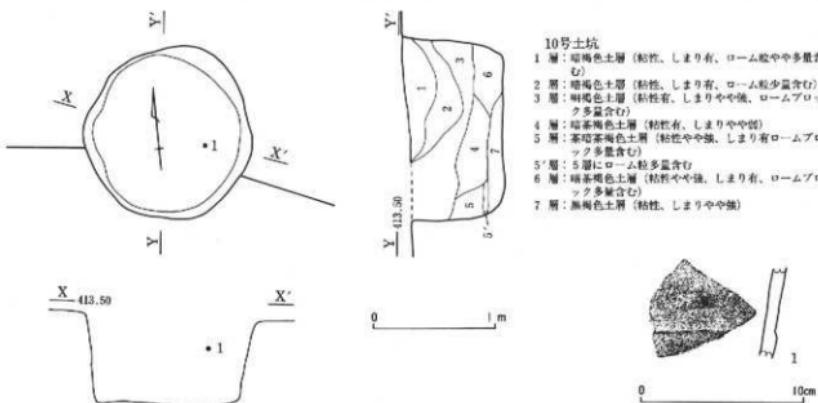
### 10号土坑 (第28図、第13表、図版 6・9)

3区の中央西側、16号土坑の南西に位置する。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸139cm×短軸138cm、下端で長軸128cm×短軸120cmを測る。深さは84cmで、壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。覆土は暗茶褐色土を基調とし、7層に分けられる。

遺物は1点出土。有肩深鉢の破片で条痕文がめぐる。縄文時代晚期終末の所産。

第13表 10号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調 整	胎土	焼成	色 調	備 考
1	深鉢	—	—	—	有肩 細密条痕文	密	良	黒褐色	繩文晩期末



第28図 3区10号土坑 (1/40・1/3)

## 11号土坑 (第29図、第14表、図版6・10)

3区のはば中央、3号流路と重複しこれにきらされている。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸156cm×短軸156cm、下端で長軸170cm×短軸170cmを測る。深さは42cmで、壁はやや袋状を成し立ち上がり底面はほぼフラットである。覆土は暗褐色土を基調とし上層にロームブロック・ローム粒を多く含み、炭化物がみとめられる。

遺物は石器が2点出土。1は凹石、ほぼ全面に擦痕がみられ、表裏ともに中央に凹がみとめられる。2は撥形打製石斧。

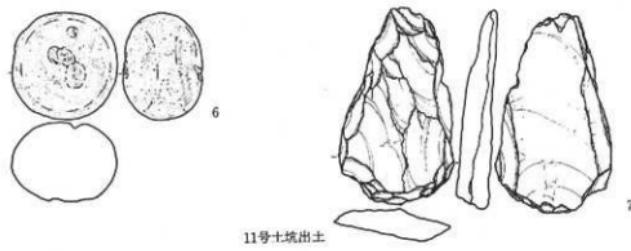
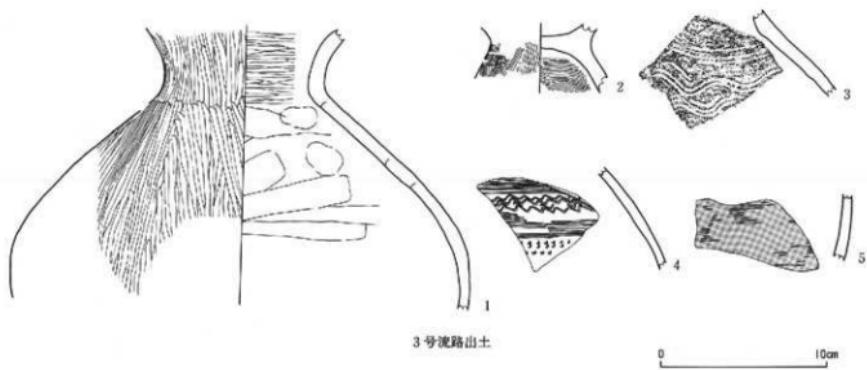
## 3号流路 (第29図、第14表、図版6・10)

3区のはば中央を南東方向へ伸び、11号土坑と重複しこれを切る。それ以降は削平のため確認不可能である。幅は約170cmを測り、深さは10cm前後を測るのみである。

遺物は38点出土した。そのうち5点を示す。1は11号土坑上に位置するが完全に上端よりも上位にあたり3号流路に属する。壺の頸部から胸部上半の破片。タテ方向にヘラミガキの調整がみられる。2は台付壺の脚部破片。4は壺の肩部破片でヘラ描波状文がめぐり、半裁竹管状工具による刺突が施されている。試掘時に検出されている。4、5とも外面に赤色塗装がみられる。以上弥生時代後期。3は壺の肩部破片で粗い櫛状工具による波状条痕文がめぐる。弥生時代中期。

第14表 11号土坑・3号流路出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調 整	胎土	焼成	色 調	備 考
1	壺	—	—	—	外:タテヘラミガキ 内:ハケ ヨコヘラミガキ	砂粒	良	椎	弥生後期末
2	台付壺	—	—	—	脚部 外:タテハケ 内:ヨコハケ	密	〃	黄褐色	弥生後期末
3	壺	—	—	—	粗い櫛状工具による波状条痕文	砂粒	〃	赤褐色	弥生中期初頭
4	壺	—	—	—	外:赤色塗彩 ヘラ描波状文	砂粒	〃	にぶい赤褐色	弥生後期末
5	壺	—	—	—	外:赤色塗彩	砂粒	〃	にぶい黄褐色	弥生後期末
番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材		
6	11号土坑	凹石	6.6	6.4	4.9	218.7	安山岩		
7	11号土坑	打製石斧	12.2	7.2	1.9	161.5	ホルンフェルス		



第29図 3区11号土坑・3号流路 (1/40・1/3)

### 12号土坑（第30図、図版6）

3区のほぼ中央、4号流路と重複しこれにきられている。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸190cm×短軸178cm、下端で長軸168cm×短軸168cmを測る。深さは106cmで、壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。底面はほぼフラットである。覆土は暗褐色土層を底面付近に薄く挟み、それより上は厚くほぼローム層の再堆積の様相を示す。

### 4号流路（第30図、第15表、図版10）

3区のほぼ中央を南方向へ伸び、12号土坑と重複しこれを切る。3号流路同様それより南は削平のため確認不可能である。北側調査区壁際では約320cmある流路の幅は12号土坑と重複するあたりでは約50cmと幅を狭める。深さは10~20cmを測る。

遺物は55点出土した。うち12点を図示。1は壺の頸部破片で弥生時代後期の所産。2~4は底部破片。3は網代压痕を有する。4は斜位の細密条痕文がめぐり、底部付近にケズリがみられる。5は深鉢の破片か。以上網文時代晚期終末の所産。6は壺の肩部破片。棒状工具による施文がみられる。8~16はいずれも単斜条痕文とみられ、弥生時代前期~中期の所産か。

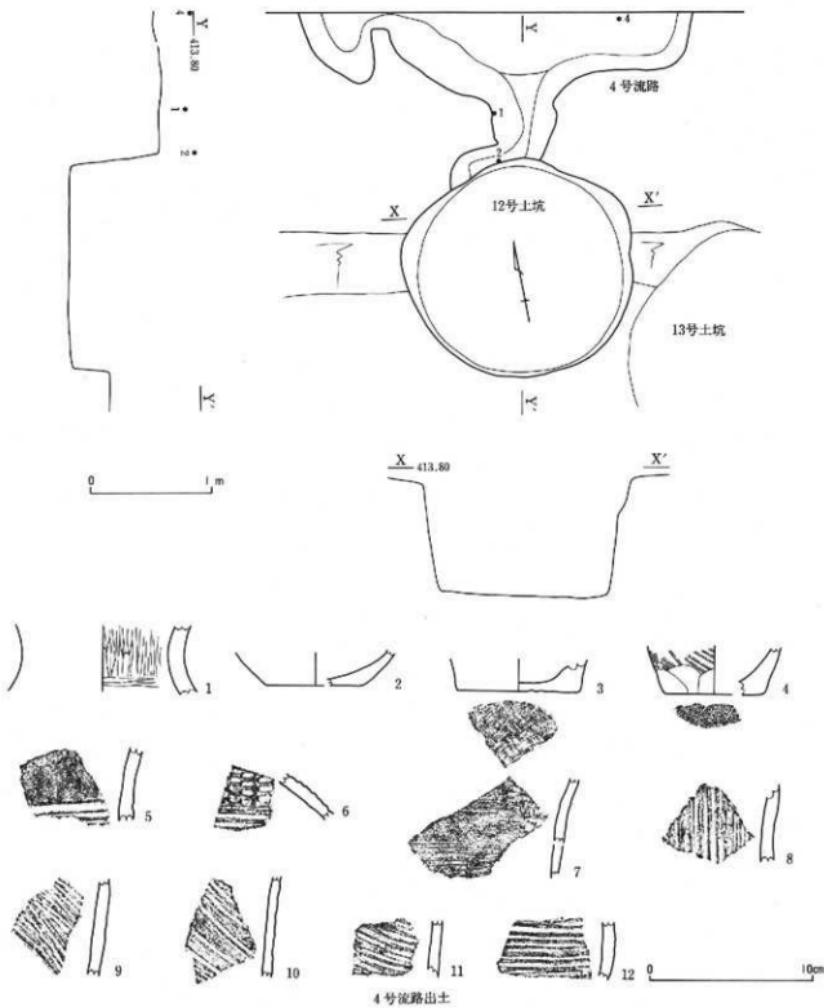
第15表 4号流路出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調 整	胎土	焼成	色 調	備 考
1	壺	—	—	—	内:ヘラミガキ	砂粒	良	橙	弥生後期末
2	壺	—	5.9	—		白色粒	〃	暗褐色	網文晚期末
3	深鉢	—	7.2	—	底部周辺へラケズリ 底部網代压痕	砂粒	〃	褐色	〃
4	深鉢	—	6.2	—	細密条痕文 底部周辺へラケズリ	砂粒	〃	明褐色	〃
5	深鉢	—	—	—	条痕文	砂粒	〃	橙	〃
6	壺	—	—	—	棒状工具による条痕文	雲母	〃	褐色	弥生中期初頭
7	甕	—	—	—	ヘラ状工具による条痕文	白色粒 雲母	〃	暗褐色	〃
8	壺	—	—	—	ヘラ状工具による条痕文	砂粒	〃	褐色	〃
9	甕	—	—	—	条痕文	砂粒 雲母	〃	にぶい黄褐色	〃
10	甕	—	—	—	ヘラ状工具による条痕文	砂粒 雲母	〃	橙	〃
11	甕	—	—	—	条痕文	砂粒	〃	にぶい黄褐色	〃
12	甕	—	—	—	条痕文	砂粒	〃	にぶい黄褐色	〃

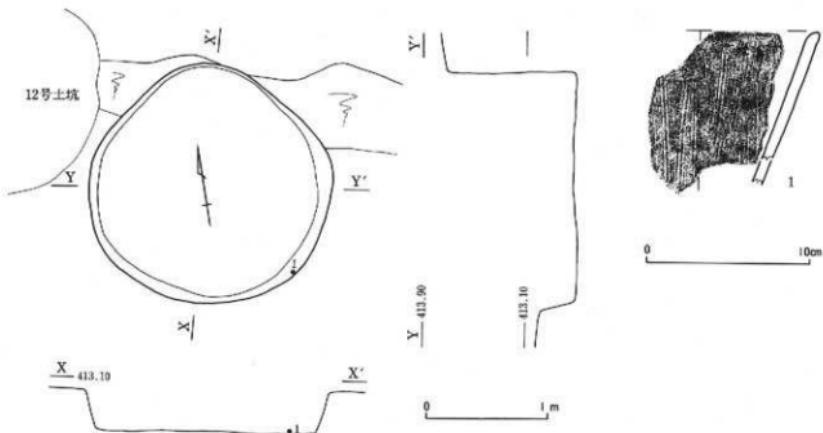
### 13号土坑（第31図、第16表、図版6・9）

3区のほぼ中央、12号土坑の南東に位置する。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸202cm×短軸200cm、下端で長軸188cm×短軸180cmを測る。深さは106cmで、削平されている南側では約30cm確認されるのみである。壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示し、東側の壁が段上を成してやや広がる。底面はほぼフラットである。覆土は暗褐色土層を底面付近に薄く挟み、それより上は厚くほぼローム層の再堆積の様相を示す。

遺物は1点のみ。土坑底部壁際から検出された深鉢の口縁部破片で細密条痕文が施されている。網文時代晚期終末の所産。



第30圖 3區12號土坑・4號流路 (1/40・1/3)



第31図 3区13号土坑 (1/40・1/3)

第16表 13号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調整	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢	14.6	—	—	粗い細密条痕文	砂粒	良	によい黄褐色	縄文晩期末

#### 14号土坑（第32図、図版6）

3区のはば中央、5号流路と重複しこれにきられている。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は上端で長軸160cm×短軸146cm、下端で長軸170cm×短軸162cmを測る。深さは120cmで下端で広がり壁はやや袋状を成す。底面は中央が若干高い凸状を示す。覆土は複雑な様相をみせ、上層は暗褐色土を基調とし、中層は暗茶褐色土、下層は暗灰褐色土をそれぞれ基調とする。計11層確認でき、ロームブロックなどを混入させている。4層上面が非常に固くしまっている。下層ほどボソボソした感触を増す。本覆土で自然科学分析用の資料を採取している（第IV章参照）。

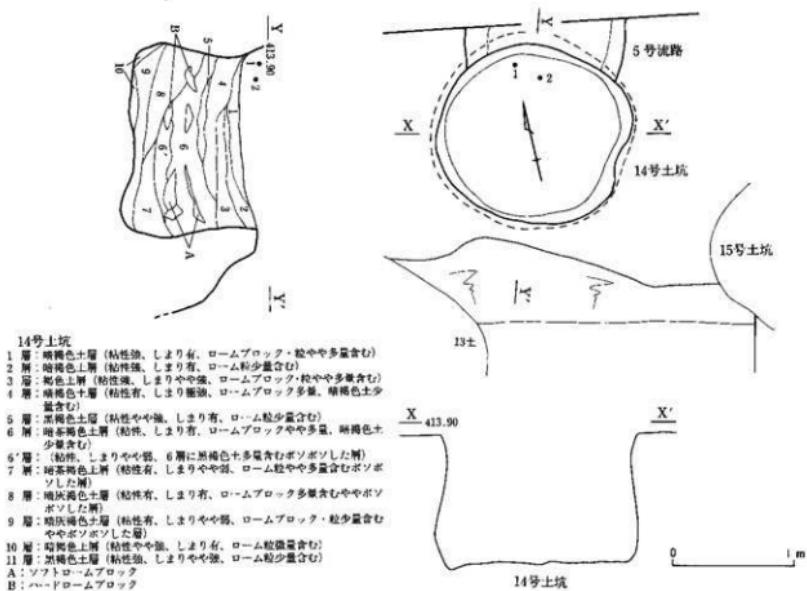
#### 5号流路（第32図、第17表、図版6・10）

3区のはば中央を南方向へ伸び、14号土坑と重複しこれを切る。4号流路同様それより南は削平のため確認不可能である。幅は約130cm、深さは約10cmを測る。覆土は暗褐色土を基調とする。

遺物は17点出土した。1は壺の口縁部から胴部下半の破片。外面調整はタテヘラミガキで、内面を観察すると頸部はしっかりと屈曲している。2は壺の底部破片底部周辺までヘラミガキがみとめられる。

第17表 14号土坑・5号流路出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	調整	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	11.4	—	—	外：タテヘラミガキ 内：ヨコハケ	砂粒	良	明褐色	古墳初
2	壺	—	10.5	—	外：ヘラミガキ 内：ヨコハケ	砂粒	"	赤褐色	"

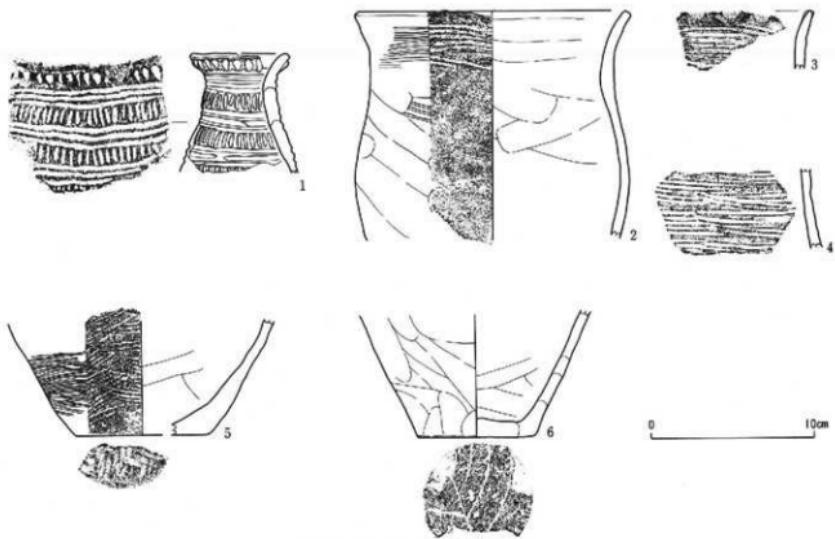
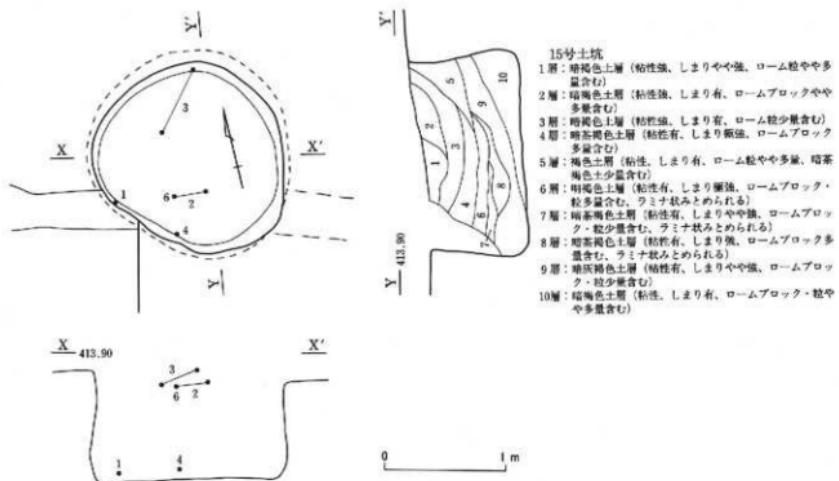


第32図 3区14号土坑・5号流路 (1/40・1/3)

#### 15号土坑 (第33図、第18表、図版6・10)

3区のほぼ中央、14号土坑の南東側に位置する。平面形はほぼ不整円形を呈し、規模は上端で長軸166cm×短軸146cm、下端で長軸170cm×短軸162cmを測る。深さは92cmで、下端が広がり壁はやや袋状を成す。底面はほぼフラットである。覆土は10層に分けられる。6～8層ではラミナ状の堆積状況が確認され、細かいロームブロックが多量に混入していた。本土坑を検討するうえで非常に興味深い堆積状況である。

遺物は13点出土した。うち6点を図示するが、土坑の最下層および上層から出土した弥生時代中期初頭とみられる土器片資料である。1と4は最下層の壁際より出土している。1は壺の口縁部から頸部破片で口縁部に刻目をもつ貼付突窓をもつ。頸部には棒状工具による3条1組の横位沈線文とへら状工具による縱方向沈線文が多段にめぐる。5は底部破片で横位から斜位の条痕文がめぐり、底部に網代压痕がみとめられる。内面にはへら状工



第33図 3区15号土坑 (1/40・1/3)

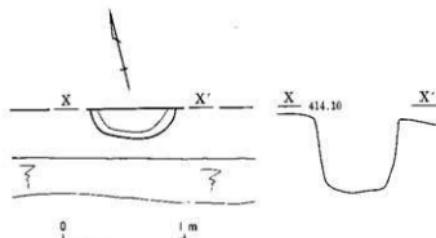
具による粗いケズリ調整がみられる。1は胎土の状況等から5と同一個体である可能性があるが出土位置は離れている。2と6は接合できないもの一括で取上げた資料が含まれており、同一個体と思われる。2は甕の破片で口縁部以下横位の条痕文がめぐる。6は甕の底部破片で2・6ともに内面にコケの付着が確認できる。3は口縁部破片で波状を成し、横位に条痕文がめぐる。6は甕の胸部破片で、横位の条痕文は棒状もしくは竹管状工具を束ねた施文具によるものとみられる。3と4も同一個体か。以上、弥生時代中期初頭庄の畠式期平行とみられる。

第18表 15号土坑出土遺物觀察表

番号	器種	口径	底径	器高	調 整		胎土	焼成	色 調	備 考
					刻目をもつ貼付突帯 橫位沈線文	縦位沈線文				
1	壺	6.2	—	—			砂粒	良	赤褐色	弥生中期初
2	甕	12.0	—	—	横位条痕文 ナデ 内面コゲ付着		砂粒	〃	赤褐色	〃
3	甕	—	—	—	横位条痕文 口縁部波状文		砂粒	〃	黒褐色	〃
4	甕	—	—	—			〃	〃	黒褐色	〃
5	壺	—	8.1	—	横位 斜位条痕文 ケズリ 底部網代压痕		砂粒	〃	赤褐色	〃
6	甕	—	7.2	—	ナデ 底部木葉痕		砂粒	〃	暗赤褐色	〃

## 16号土坑（第34図）

3区の中央西より、北側の壁際に位置する。確認できる規模は長軸で71cm下端で長軸56cmを測る。深さは62cmで、壁は急角度で立ち上がり、断面形態は鍋底状を示す。覆土は暗褐色土を基調とする。



第34図 3区16号土坑 (1/40)

## 6号流路（第27図）

3区東側に位置し、北東部から南西部に伸びる。幅は80~160cmを測る。深さは約10cmで底面は凹凸がある。

## 第6節 遺構外出土遺物（第35・36図、第19・20表、図版10）

1~6は口縁部破片。1は深鉢の波状口縁、波頂部の破片で無文。くびれ部に沈線が横走する。2は波状口縁の波長部破片でRL繩文が充填されている。波長部は内面に隆帯で三角形のモチーフが描かれている。3は口唇部に粘土紐がめぐりその中に平行沈線が横走し、交互刺突文がみられる。4は口唇部に繩文がめぐり、竹管状工具による沈線によりモチーフが描かれ、沈線区間に円文を配し、玉抱き三叉文状となる。5は口唇部が肥厚し、繩文が施されている。直下を2種類の太さの押引文が平行して横走する。またその下の隆帯上には細いヘラ状工具による鋸齒状の刻みがめぐる。6は口縁部下に逆U字文が連続する。9は2列の押引文がめぐる。11は底部破片。13は壺の口縁部破片。沈線が横走し、器面に吹きこぼれ状の炭化物が付着している。内面はミガキ調整がみられる。14は深鉢の脇部破片で捺糸文が施文される。15は深鉢の胴部下半から底部の破片。RL繩文を縦方向に施文し、内面は輪積痕が確認できる。

16・17は口縁部破片でともに浮線文がめぐる。18は鉢の胴部下半の破片で斜位の細密条痕文が施され、下部にケズリがみられる。19は浅鉢の口縁部破片で口縁端部のメガネ状突帯がつく。口縁下には沈線がめぐる。20は浅鉢の破片で口縁へ向け外反する。胴部にいわゆる浮線網状文がめぐる。以上繩文時代晩期終末の所産とみられる。22は刻みをもつ甕の口縁部破片。23は土師器片。24は須恵器で壺の口縁部破片。

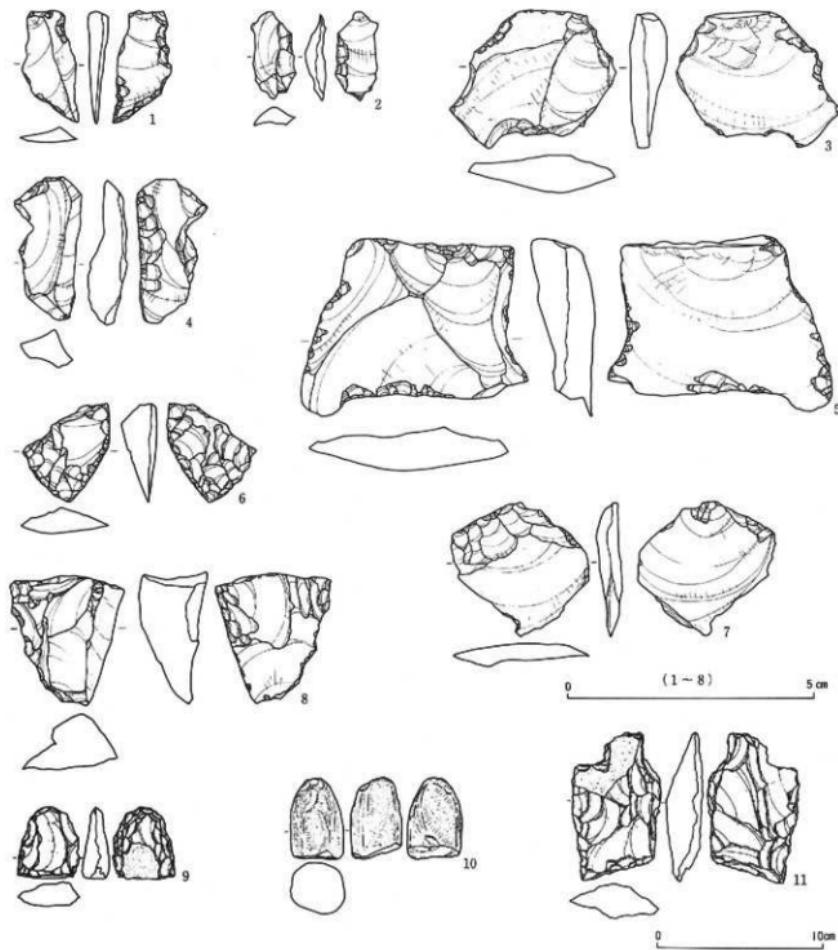
石器は黒曜石製が8点である。6は両面からの加工による刃部がみられる石鎌か。その他はいずれも2次加工のみられる剝片。側縁部に連続した加工による刃部作り出しのみとめられるものもあり削器・搔器としての用途を考えられる。9は打製石斧の基部破片。10は磨製石斧の基部破片。11は楔型石匙の未製品とみられる。



第35図 遺構外出土土器 (1/3)

第19表 遺構外出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	底径	器高	調 整	胎土	焼成	色 調	備 考
16	鉢	—	—	—	浮線文	白色粒	良	にぶい黄褐色	縄文晩期末
17	鉢	—	—	—	浮線文	白色粒	〃	にぶい黄褐色	〃
18	鉢	—	—	—	細密条痕文 ケズリ	白色粒	〃	にぶい黄褐色	〃
19	浅鉢	—	—	—	メガネ状突帯 浮線文	白色粒	〃	暗褐色	〃
20	浅鉢	—	—	—	浮線網状文	白色粒	〃	褐色	〃
21	鉢	—	—	—	底部網代压痕	砂粒	〃	にぶい黄褐色	〃
22	甕	—	—	—	口縁部刻	砂粒	〃	褐色	
23	上師器	—	—	—		密	〃	橙	
24	須恵器	—	—	—		密	〃	灰白色	



第36圖 遺構外出土石器 (1/1 · 1/3)

第20表 遺構外出土遺物觀察表(2)

番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
1	1區	2次加工片	2.3	1.1	0.3	0.7	黑曜石
2	1區	2次加工剝片	7.8	3.7	1.1	32.5	頁岩
3	1區	2次加工剝片	2.8	3.3	0.8	5.5	黑曜石
4	1區	2次加工剝片	3.1	1.9	0.8	2.1	黑曜石
5	1區	2次加工剝片	3.7	4.7	0.9	13.8	黑曜石
6	2區	石錐	2.1	1.8	0.5	1.5	黑曜石
7	2區	2次加工剝片	2.7	2.8	0.4	3.1	黑曜石
8	2區	2次加工剝片	2.7	2.4	1.1	6.1	黑曜石
9	1區	打製石斧	4.5	3.7	1.1	26.4	砂岩
10	1區	磨製石斧	5.1	3.4	3.2	68.1	綠岩
11	2區	石匙	9.2	5.5	2.2	97.3	砂岩

## 第IV章 自然科学分析

これまでみてきた通り、本調査により縄文時代中期、縄文時代晩期末～弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代初頭に比定される遺構や遺物が多数確認されている。特に縄文時代晩期末～弥生時代中期では、土器などを伴う円筒状の土坑が多数検出されており、山梨県内でも当該期の遺構や遺物の出土例が少ないとから貴重な資料と考えられる。

今回の分析では、遺構の用途に関する情報を得るために、土壤理化分析を実施した。測定する成分は、特に動物の体組織や骨に多く含まれる、リン酸とカルシウムの含量測定を行う。リン酸は、動物体に多量に含まれ、土壤中に固定されやすい性質がある。そのため、動物遺体などが埋葬されると土壤中にリン酸の富化が認められることから、遺体あるいは遺骨の痕跡を推定することができる。また、リン酸の供給源としては植物体もある。ただし、植物由来のリン酸成分が供給された場合、リン酸含量よりも腐植含量が高くなる。よって、植物体の影響を調べるために、腐植含量の測定も実施する。

### 1. 試料

試料は、新居田B遺跡1・2区の1号住居址・3号住居址・9号土坑および北壁、3区の14号土坑とサブトレーンチ基本層序から採取された（第37図）。

1区と2区は隣接した調査区で、両調査区を合わせて、住居址3軒（1～3号住居址）、径約1.1～1.5mの円筒状の土坑9基（1～9号土坑）が検出されている。1号住居址と3号住居址は、1区と2区の境で検出されており、縄文時代中期に比定される3号住居址と重複し、古墳時代初頭に比定される1号住居址が構築されている。また、9号土坑は、3号住居址と重複し構築されている。試料は、1号住居址覆土から5点、3号住居址覆土から4点、9号土坑覆土から5点が採取された。また、北壁の基本層序から、4点試料が採取された。

3区は、1・2区から約100mほど東へ離れた場所に設定され、土坑7基（10～16号）が検出されている。これらの土坑は、径1.4～2.0mの円筒状を呈し、その上部に流路が認められている。試料は、14号土坑の覆土から15点採取された。また、サブトレーンチ基本層序からは、11点の試料（試料番号1～11）が採取された。

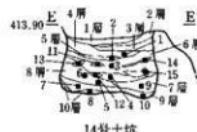
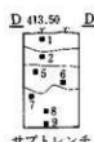
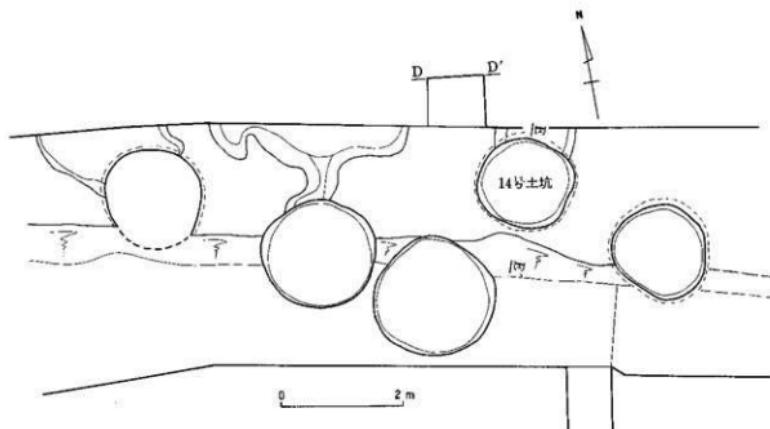
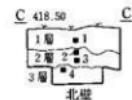
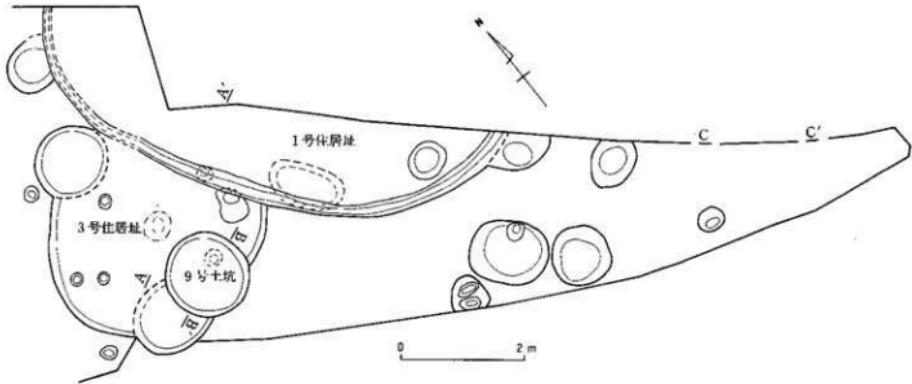
なお、試料は、9号土坑・14号土坑の用途に関する情報を得るために、各遺構から採取された土壤試料から比較対照試料も含め検討し、土壤理化分析用試料として16点を選択した。分析対象試料を表1に示す。

### 2. 分析方法

リン酸は硝酸・過塩素酸分解一バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解一原子吸光光度法、腐植はチューリン法でそれぞれ行った（土壤養分測定法委員会、1981）。以下に、各項目の具体的な操作工程を示す。

第21表 分析試料の一覧

調査区	地点	層位	番号	分析	箇所
1・2区	1号住居址	複土	1		古墳時代初頭
			2		
			3		
			4		
			5		
	3号住居址	複土	1	○	縄文時代中期
			2		
			3		
			4		
3区	9号土坑	1層	1		弥生時代中期
			2	○	
			3	○	
			4	○	
			5	○	
	北壁	1層	1		基本層序
			2		
			3	○	
			4	○	
サブトレーンチ	14号土坑	1層	1	○	弥生時代中期？
			2		
			3	○	
			4	○	
			5	○	
			6		
			7		
			8		
			9		
			10	○	
	無機色土	2層	9		
			10	○	
			11		
			12		
			13		
サブトレーンチ	無機色土	3層	14		
			15		
			1		基層序
			2	○	
			3		
サブトレーンチ	4層	4層	6	○	
			7		
			8		
			9		



\* 土層説明は第II・III章を参照のこと。

第37図 土壌サンプル採取箇所 (1/80)

#### <試料の調整>

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通して通す（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を、加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉碎し、0.5mmのふるいを全通させる（微粉碎試料）。<リン酸・カルシウム>

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて、再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（ $P_2O_5$ ）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（ $P_2O_5\text{mg/g}$ ）とカルシウム含量（CaO $\text{mg/g}$ ）を求める。

#### <腐植含量>

微粉碎試料0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に、0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（%）を算出する。

### 3. 結果

結果を第22表に示す。腐植含量は、1.34~4.34%（平均：2.39%）である。1・2区の9号土坑、3区の14号土坑のいずれも、土坑の覆土底部で高い傾向にある。また、基本土層では、上位でやや高い傾向を示す。

リン酸含量は、0.93~2.75 $P_2O_5\text{mg/g}$ （平均：1.68 $P_2O_5\text{mg/g}$ ）である。1・2区北壁基本土層2層（試料番号3）、3区14号土坑8層（試料番号5）で若干高い傾向を示すが、全体的に測定値が低い。

カルシウム含量は、0.99~6.17CaO $\text{mg/g}$ （平均：3.95CaO $\text{mg/g}$ ）である。1・2区3号住居址覆土と9号土坑、また3区14号土坑とも、基本層序より高い値が得られる。

第22表 土壤理化分析結果

測定区	地点	層位	番号	土性	土 色	腐植含量 (%)	$P_2O_5$ ( $\text{mg/g}$ )	CaO ( $\text{mg/g}$ )	備 考
1・2区	3号住居址	覆土	1	LIC	10YR3/4 暗褐色	1.99	1.44	4.19	縄文時代中期
		1層	2	LIC	10YR4/6 暗褐色	1.34	1.44	1.26	弥生時代中期
		2層	3	LIC	10YR3/4 暗褐色	1.63	1.70	1.37	
		3層	4	LIC	10YR3/4 暗褐色	2.44	1.85	5.21	
		5層	5	LIC	10YR3/4 暗褐色	2.27	1.79	5.05	
		北壁	2層	3	LIC	5Y3/2 オリーブ褐色	3.82	2.75	4.29
		3層	4	LIC	10YR3/4 暗褐色	1.44	1.40	3.68	基本層序
		4層	1	LIC	10YR3/3 暗褐色	2.10	0.93	3.95	弥生時代中期
3区	14号土坑	6層	3	LIC	20YK2/2 黒褐色	2.83	1.23	4.84	
		6層	4	LIC	10YR2/2 黒褐色	3.64	1.63	5.77	
		8層	5	LIC	10YR3/4 暗褐色	1.74	2.49	4.86	
		9層	6	LIC	10YR3/2 黒褐色	3.07	1.78	5.02	
		10層	8	LIC	10YR2/2 黒褐色	4.34	1.63	6.17	
		9層	10	LIC	10YR3/4 暗褐色	2.18	1.64	5.52	
		2層	2	LIC	10YR3/2 黒褐色	2.24	1.55	0.99	基本層序
		3層	6	LIC	10YR3/4 暗褐色	1.34	1.39	1.56	

注1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準色色帳（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

注2) 土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト試験会編、1984）の野外土性による。

LIC=軽粘土（粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%）

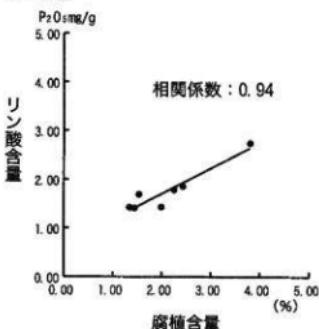
### 4. 考察

分析の結果、リン酸含量が0.93~2.75 $P_2O_5\text{mg/g}$ 、カルシウム含量が0.99~6.17CaO $\text{mg/g}$ であった。これら両成分について相関を調べてみると、相関係数が0.26であり、ほとんど相関していない。一般的にカルシウムが土壤中に普通に含まれる量、いわゆる天然賦存量は1~50CaO $\text{mg/g}$ と言われており（藤貫、1979）、含量幅が大きい傾向にある。これらのことから、カルシウムは、天然賦存量の範囲内にあると言え、ここでは補足的に扱うこととする。

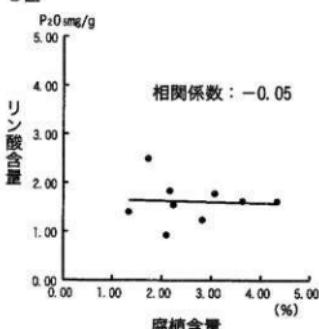
また、リン酸の天然賦存量は、Bowen(1983)、Bolt & Bruggenwert(1980)、川崎ほか(1991)、天野ほか(1991)

などの報告事例がある。これらの調査事例から推定される天然賦存量の上限は、約  $3 \text{ P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$  程度である。また、化学肥料の施用など人為的な影響を受けた黒ボク土の既耕地で  $5.5 \text{ P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$  という報告例があり（川崎ほか、1991）、既存の分析調査において骨片などの痕跡が認められる土壤で  $6.0 \text{ P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$  を越える場合が多い（パリ）。

### 1・2区



### 3区



第38図 リン酸と腐植の相関関係

ノ・サーヴェイ株式会社、未公表）。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべて  $\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$  で統一した。これらの値を著しく越える土壤では、外的要因（おそらく人為的影響によるもの）によるリン酸成分の富化が指摘できる。これらの調査事例と比較すると、リン酸含量も天然賦存量の範囲内にある。

ここで、植物体の影響を考えるために、腐植との関係を参考にすると図2で示すように、腐植含量とリン酸含量の関係は、1・2区と3区で大きく異なる。まず、1・2区では、両成分の相関係数が0.94であり、強い正の相関関係にある。これに対して、3区では、両成分の相関係数が-0.05であり、負の相関関係にある。

以上の点から、以下のような点が想定される。1・2区では、基本土層2層において、天然賦存量に近い測定値が得られているが、これは後代の影響によると考えられる。しかし、縄文時代中期の3号住居址、弥生時代中期の9号土坑とも、外的要因によるリン酸の富化が認められず、覆土中に含まれるリン酸はほとんどが土壤腐植に由来していると考えられる。したがって、これらの遺構内に遺体が埋納されていたか指摘することは難しく、9号土坑が墓坑として利用されていたか積極的には示唆できない。一方、3区の14号土坑は、腐植とリン酸の相関関係が低いため、外的要因によってリン酸が富化されたと想定される。したがって、14号土坑は内部には動物遺体が埋納された遺構であった可能性がある。

## 5. 結び

今回は、9号土坑および14号土坑の土壤の理化学性について分析を実施し、遺構の用途に関する情報を得た。分析結果では、9号土坑は墓坑の可能性を積極的に指摘できなかったものの、14号土坑では、1) 土坑覆土下部からリン酸の天然賦存量を上回る値を得た、2) リン酸と腐植の相関性が低いなどの点から、動物遺体の埋納の可能性が指摘された。

ところで、動物遺体の埋納の可能性については、土壤中の脂肪酸やステロール組成の分析例から、コレステロールとコプロスタノールの多産と、アラキシン酸（C20）・ベヘン酸（C22）・リグノセリン酸（C24）の検出が必要である（中野、1993：1995）とされている。今後は、脂肪酸やステロール組成などのより多角的な分析調査を複合実施し、検証することが望まれる。また、今後本地域の縄文時代晩期終末～弥生時代中期相当の遺構について分析事例を蓄積し、考古学的成果などを合わせて比較検討を行い、さらに該期土坑の用途について明らかにしていきたいと考えている。

## 第V章 調査の成果と課題

### 第1節 各時代の新居田B遺跡の様相（第39図）

本遺跡で検出された主な遺構は住居址3軒、埋設土器1基、竪穴状遺構1基、土坑23基であり、出土遺物から当遺跡で確認される時代はおおよそ縄文時代中期初頭、縄文時代晚期終末～弥生時代中期初頭、弥生時代後期末～古墳時代初頭の3つの時代に分けられる。

それぞれの時代について周辺遺跡における位置付けなどを行いながら簡単にまとめてみたい。

#### 縄文時代中期初頭の様相

当該期の遺構は1区・2区に跨って存在する3号住居址が挙げられ、遺構外でも当該期の遺物が出土している。遺物からは主に五領ヶ台II式（新）～洛沢式1段階を示しているが、口唇部に縦文をめぐらすなど五領ヶ台式の様相が強いものが多い（第12図2～4）。

六科丘の台地ではこれまでに長田口遺跡（昭和63～平成3年）と新居田A遺跡（平成11～12年）の調査区が交わる辺りを中心で当該期の遺構が検出されており（長田口遺跡8号・9号住居址、新居田A遺跡8号住居址）、六科丘遺跡では検出されていない。遺構外遺物の分布をみても長田口遺跡より東では薄くなっていることから、今回の住居址の検出は当該期の遺物・遺構の広がりを考えるうえで新しい知見を与えた。

#### 縄文時代晚期終末～弥生時代中期初頭の様相

縄文時代晚期終末～弥生時代中期初頭の細密条痕文～条痕文を中心とした土器や、それらを伴う土坑群は本遺跡を最も特徴付ける遺構・遺物である。

本調査区で検出された当該期の遺構として、1号竪穴状遺構、1号埋設土器、土坑があげられる。土坑については後述するが、全てが同じ時期・性格であるとは考えられないことや、遺物を出土していないものも多くある。そのまま遺構の帰属時代を示す訳ではないが、ここでは出土遺物から各遺構の時代の目安としたい。

当該期の出土遺物から、大まかに2つの時期にまとめることができるが、後述する通りそれぞれの間をつなぐ資料も確認されている。遺物Naは報文で用いたものを指し、弥生時代の編年位置付けは「山梨県史」による中山氏の編年を用いる。

##### ①縄文時代晚期終末～弥生時代前期（冰1式併行～弥生0(3)期併行）

1号竪穴状遺構 1号土坑 2号土坑 3号土坑 4号土坑 7号土坑 10号土坑 13号土坑

当該期の中でも、出土量的には縄文時代晚期終末を中心とする。該期の遺物は縦位の細密条痕文を施したものを中心とし、施工工具はヘラ状工具によるものとみられるものが多い。細密条痕文は底部付近までみられ、底部周辺にケズリがみられる。3号土坑1・4・4号土坑1のように細密条痕文に稻妻文の施されたものもみとめられる。

13号土坑では土坑底面直上で深鉢の口縁部破片が出土しており、該期の遺構を示す数少ない例である。

周辺地域まで目を向けると、平成10年に実施した横町長田口遺跡7号土坑（第39図）では当該期より先行するともみられる浮線文をもつ縄文時代晚期終末の女鳥羽川式土器片の一括資料が出土している。長田口遺跡からは試掘時の出土遺物として他に離山式の土器片も出土しており、今回の調査区と併せてみると漆川の崖沿いに縄文時代晚期終末の浮線文土器・細密条痕文土器（女鳥羽川式～冰式）までをみとめることができる。

また、出土量はすくないものの①に後出し、条痕文をもつものの②の段階まで下らないと思われる土器片（4号土坑2）や、口唇部に押圧痕をもつ深鉢がある（7号土坑1）。

##### ②弥生時代前期～弥生時代中期初頭（弥生1(2)～2期併行）

1号埋設土器 9号土坑 15号土坑 20号土坑 （4号流路）

当該期の中では、弥生時代中期初頭の資料を中心とする。該期の土器片は条痕文土器が殆どを占めるが、中に15号土坑1のように沈線文による土器片もある。また、3号土坑や7号土坑から出土した口縁部に貼付突起の

めぐる広口壺の破片は前期末まで遡るものとみられる。

1号埋設土器はその前後の時期の可能性がある。胴部下半の破片のため、報文で記したとおり器形は深鉢と壺の両方から考えることができる。壺だとした場合、弥生時代前期に遡る広口壺の例として北巨摩郡明野村下内遺跡225号土坑(明野村教育委員会1997)の例があり、立位の大型壺を埋納した再葬墓とみられる。また、北巨摩郡大泉村寺所遺跡2号、5号土坑のように土器片に加え碟が出土し、再葬墓の可能性を示す例もある。本遺跡1号埋設土器は底部がやや傾斜し、立位とはいいにくい出土状況を示すものの縄文の充填された壺の肩部破片が蓋状にみとめられることや、碟を伴っていることなどから、同様の性格であると考えられる。

15号土坑の一括資料は上層出土遺物と底面直上出土の土器片とが同一個体の可能性を示している点など土坑の性格を知る上で大変興味深い。出土遺物の類例は山梨県内では非常に稀で、東八代郡中道町米倉山B遺跡や、同じく菖蒲池遺跡などに類例が求められる(中山2000、山梨県教育委員会1996)。

### 弥生時代後期~古墳時代初頭の様相

当該期の遺構は1区~2区の1号・2号住居址、3区の3号~5号流路が挙げられる。1号住居址からは、周辺地域では出土しないことがむしろ特徴的であったS字状口縁付台付甌が床面直上より出土している。また、3区の流路からは弥生時代後期の様相をもつものと古墳時代初頭の様相をもつものが混在しており、調査区より北西部の標高の高い辺りに住居址の存在を予測させている。本調査により当地周辺における該期の集落がさらに崖際まで広がることとなつた。

## 第2節 土坑について

本遺跡からは合計23基の土坑が検出された(1号~23号土坑)。分布状況からは1・2区(1号~9号、17号~23号)と3区(10号~16号)とに分かれ、約80mの距離を隔てている。

### 土坑群の設定

これら土坑の形状は報文でも示したとおり、平面形が正円形を呈するものが多く、また、上端と下端の径の差が少ないうちは円筒状で、更に底はフラットで鍋底状を示すものが多い。

これらを便宜上数値でまとめてみると(第23表)、まず、平面形における長径に対する短径の割合をそれぞれみてみると、44.4~76.0%と楕円形を示す一群(17・18・21号土坑)を除き86.3~100.00%とほぼ正円形に近い数値(平均95.5%)に集中することができる(長径不明の16号・22号・23号土坑を除く)。

また、上端の長径に対する下端の長径の割合をみてみると、53.2~73.0%と逆台形の傾斜をもって立ち上がる形状の土坑(17号~21号土坑)、109.0~119.7%と下端の方が上端よりも大きくオーバーハングした形状の土坑(11・14・15号土坑)、他は全て82.0~92.9%と上端と下端に大きな差は無く急角度で壁が立ち上がる(長径不明の22号・23号土坑を除く)。ただし、これらの数値は削平などによる土坑の遺存状態にも影響されるためこのばかりとはいえない。しかし、これらの結果と底部の凹凸などを併せてみてみると、2区東側に分布する17号~23号土坑はそれら以外とは異なる形状を示すことが分かり、土坑の機能、性格の違いを示すものと考えられる。

それでは似た形をを持つ1・2区と3区の土坑群においても約80mも距離を隔てており、この2群に関して底部の長径により規模を比較すると、96~128cm(1号~10号土坑)と、168~188cm(11号~15号土坑)に分けられ、10号土坑の例外はあるものの規模の差に傾向をとらえることができ、これら2まとまりをもって土坑群とみなすことができる。

第23表 土坑規模比較表

分布調査区	1区								2区								3区						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
土 坑 №	117	122	128	129	118	96	104	120	128	128	170	168	188	170	170	*	55	50	65	92	72	*	*
底 部 長 径(cm)	91.4	87.8	82.1	83.3	88.1	85.7	92.9	89.9	90.8	92.8	109.0	88.4	93.1	119.7	109.6	78.9	59.8	53.2	65.7	72.0	59.0	*	*
下端・上端(%)	86.3	100.0	98.4	95.0	98.3	93.8	94.2	95.0	89.1	93.8	100.0	100.0	95.7	95.3	95.3	*	65.5	76.0	100.0	92.4	44.4	*	*
短径・長径(%)	※……不明																						

土坑の形状で特記すべきものとして7号土坑が挙げられ、土坑の底からは周溝状に巡る溝状の凹みが検出された。凹みの幅は約6~8cm、深さは約3cmであり、西側で一部検出されなかった。覆土は焼土粒を微量含んでいる。類例を待ちたいところである。

#### 土坑の時期

覆土出土土器片をもって土坑の時期を検討すべく、目安として土坑の底部直上および覆土下層からの出土例のみを挙げてみると、明確な例として3基が挙げられる。

13号土坑で縄文時代晚期の土器片を伴い、9号・15号土坑で弥生時代中期初頭の土器を伴っている。したがって2つの土坑群において時期的な差を見つけることはできない。また、15号土坑のように覆土の上層と下層で同一個体とみられる土器片が出土している例もあり、他の土坑で上層の遺物も含めて考えれば、前節の通り2つの土坑群はさらに時期が混在することとなる。

#### 土坑の性格

ところでこれら2群を形成する土坑（1号～15号土坑）の用途であるが、県内の他の例として北巨摩郡大泉村寺所遺跡では該期の土坑群について土坑墓的性格の可能性を指摘している。

本調査ではその点について自然科学分析を実施した。9号土坑・14号土坑、ならびに比較資料としてその周辺の土壤資料を用いて自然科学分析を実施したところ、14号土坑で土壤腐食とリン酸の相関関係から動物遺体が埋納された可能性が指摘できた。制限あるなかでの自然科学分析の実施であり、今後の課題としてより多角的な分析の実施が必要とされるところである。

しかし、その点で考えなければならないものとして、1号埋設土器の存在が挙げられる。先述した通り時期は弥生時代前期から中期初頭の範疇でとらえられ、土器が立位であるとはいいくものの墓的性格である可能性は高い。土坑群とはほぼ同様な時期を示すものの掘方の違いは歴然としており、両者が混在する点で注目したい。

他の例についても触れておきたい。山梨県外ではあるが当該期の土坑群の例として、群馬県多野群吉井町神保藤塚遺跡などがあげられる（健群馬県埋蔵文化財事業団1993）。これらは直径約30mの円形に配置された土坑群であり、その点では当遺跡とは異なるが土坑自体の規模や形状は非常に似ている。土坑は直径1m程を中心としながら約2mのものまであり、平面形は正円形と長円形を主とし、ややオーバーハングした断面形のものも含む。遺物の出土状況は散漫であり、これらについて墓としての機能は想定し難いとし、崖外貯蔵あるいは二次的に廻棄等に用いられた土坑の可能性が示されている。

新居田B遺跡の土坑の覆土や断面形を観察すると、壁がオーバーハングしているものや、3区を中心にロームの再堆積層が土坑全体を埋めている例もあり、袋状あるいはフラスコ状の断面形を呈していた可能性がある。また、遺物の出土状況も散漫である。さらに、再構築に主体的にみられる壺型土器の出土例も少ない。以上のような状況から、土坑の用途を考える上で貯蔵穴的性格も可能性のひとつとして挙げておきたい。ただ、気になる点として7号土坑底部の周溝状の凹みと、15号土坑で覆土断面にラミナ状の様子がみとめられた点があり、水の影響を感じさせる。

いずれにしても可能性を述べるのみとなるが、以前数少ない当該期の土坑群を解明する貴重な資料となろう。

### 第3節 新居田B遺跡の存在

#### 原始古代の平岡の台地

以上みてきたように、新居田B遺跡は縄文時代晚期終末～弥生時代中期初頭を中心としながらも縄文時代中期初頭～古墳時代初頭までが検出された複合遺跡の様相を示している。一見、途中途中が抜けているように感じるところだが、周辺部まで目を向けると本遺跡を含む六糸丘～平岡の台地には連絡と人々の営みがおこなわれてきたことがわかる。

旧石器時代～縄文時代前期までは遺物が検出されるのみで生活の痕跡まではわかっていない。しかし、前述した通り本調査区でも検出された縄文時代中期初頭の遺構から連絡と繋がってゆくのである。縄文時代中期首次式

期は長田口遺跡と新居田A遺跡で竪穴式住居址と土坑が検出されており、縄文時代後期初頭には長田口遺跡で多くの痕跡を残すこととなる。平成10年に実施された長田口遺跡の調査で、遺物の出土量で圧倒的に主体を成したのは縄文時代後期初頭から前葉にかけての土器片である。縄文時代晚期終末～弥生時代中期は本遺跡が重要な位置を占め、長田口遺跡の土坑を含め漆川を望む崖線沿いに土坑の分布がみられ、平面的にも時間的にも繋がることが判明した。弥生時代後期～古墳時代初頭にはそれぞれ六科丘遺跡、長田口遺跡を中心とした集落の展開がみられ、両域を繋ぐ位置に存在する該期の住居址の存在が注目される。これまで、当該期のメルクマールとなるS字状口縁付合符甕が住居址に伴って出土しないことがこの周辺地域の特徴とされてきたが、今回の調査により少しずつではあるが事例が増えてきた。台地先端部には六科丘古墳（古墳時代中期）も造られ、その後は顯著な生活の跡は中世までみとめられない。

#### 新居田B遺跡の存在

先述した通り、山梨県内において縄文時代晚期～弥生時代中期の遺構・遺物の調査例は非常に少なく、最も空白が多い時代であったが、近年陝西地域の扇状地の遺跡を中心に弥生時代中期の資料の増加が著しいところである。甲西バイパスや中部横断自動車道建設などに関わる大規模調査をはじめとして、御影町、甲西町、若草町、白根町の扇状地で遺構を伴わないものの膨大な量の土器片が検出されている。

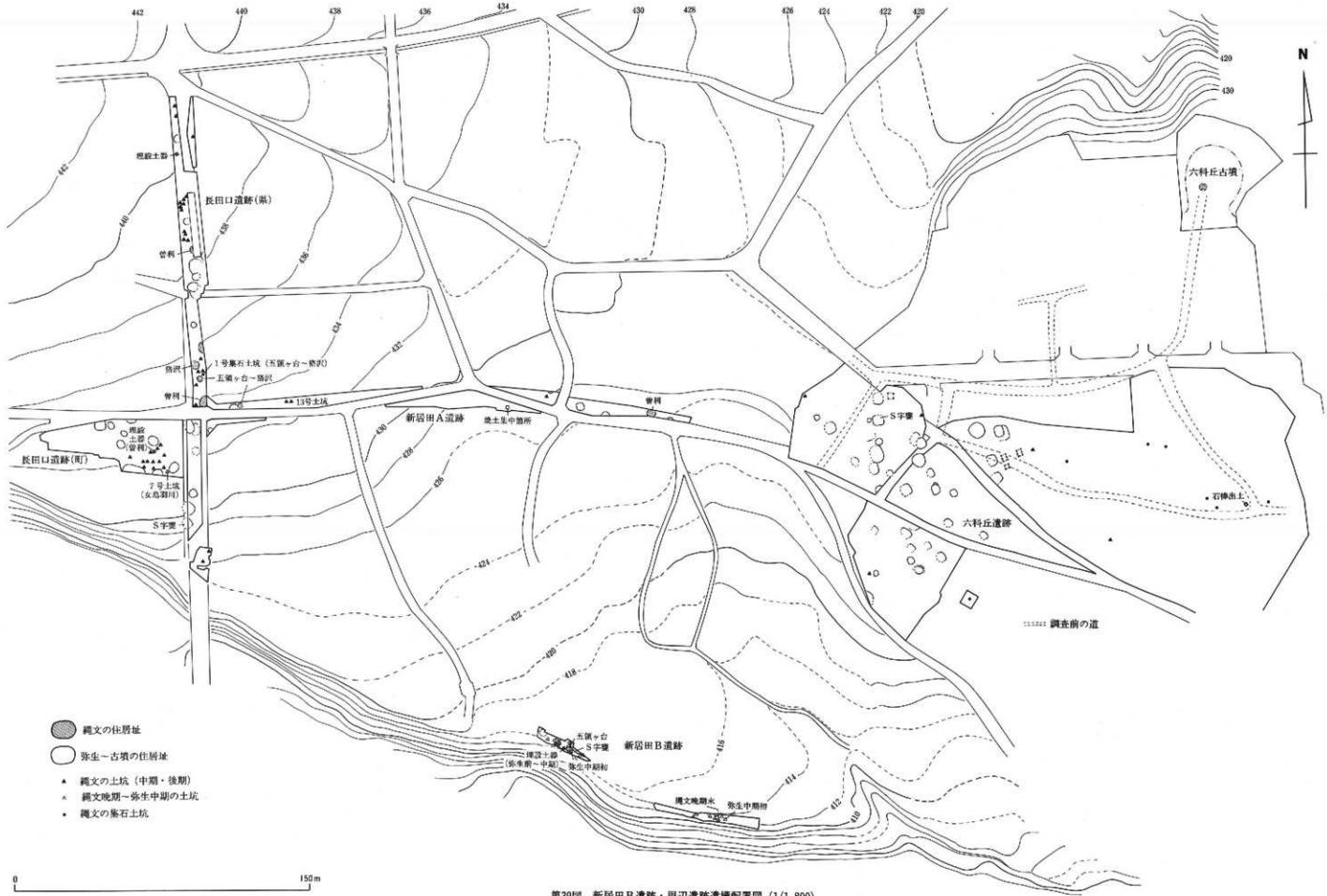
当該期の遺物が大量に出土するものの遺構が伴わないことから、該期の生活形態として「『地面に痕跡を残さないような住居址』一すなわち遊動的な生活」-形態が当該期の特徴であるとする考えも示されている（山梨県教育委員会2001）。今回台地上に遺構が検出されたことはこれらを根本から否定するわけではなく、それらの可能性も含め、立地の違いが何を示すのか、本拠地とキャンプ地的な差異なのか、ほかにもっと違った意味を示すのか、当時の生活形態を考える上で可能性を広げることとなったといえよう。

ただし、注目したいのは漆川を望む崖際に分布する点であり、漆川の流路変遷を無視することはできず、本来もっと広く低地にむかって緩やかな傾斜が続いている、集落が広く展開していたのではないかと考えさせられるうことや、土器片にみられる想状あるいは雜穀類の圧痕からこの近くでの水田の存在などを想像させる。

いずれにしろ、当時の人々が川沿いの台地になんらかの営みをしていたことは事実であり、陝西地域の低地部で該期の遺物が遺構に伴わずに大量に出土する意味を解明する貴重な一步だと本遺跡の調査を位置付けたい。さらに、これら扇状地の出土資料はいずれも弥生時代中期を中心とするものであり、出土量の濃淡はあるにしろ縄文時代晚期まで遡り、弥生時代前期、弥生時代中期まではば弊がったという点は非常に大きな成果といえよう。

#### 引用・参考文献

- 中沢道彦 2001 「土器型式編年論 晩期」 「縄文時代12」 縄文時代文化研究会  
中沢道彦 1998 「『氷I式』の細分と構造に関する試論」 「水遺跡発掘調査資料図譜刊行会」  
中山誠二 1985 「甲斐における弥生文化の成立」 『研究紀要2』 山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター  
中山誠二 1992 「宮ノ前遺跡出土の縄文時代末葉から弥生時代中期初頭の土器群」 『宮ノ前遺跡』 甲斐市埋蔵調査会  
中山誠二 2000 「米倉山B遺跡出土の弥生土器の再検討」 『山梨県史研究第8号』 山梨県  
森原 明廣 1993 「富浦池遺跡」 『年報9』 山梨県埋蔵文化財センター  
明野村教育委員会 1997 「下大内遺跡」 明野村文化財調査報告11  
御群馬県埋蔵文化財事務団 1993 「神保富士塚遺跡」 群馬県教育委員会  
新宿区総合健康村道路調査団 1994 「健康村遺跡」  
山梨県教育委員会 1993 「長田口遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第82集  
山梨県教育委員会 1987 「寺所遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第27集  
山梨県教育委員会 1998 「八田畠遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第150集  
山梨県教育委員会 2001 「横堀遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第184集  
山梨県教育委員会 1997 「油田遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第130集  
山梨県教育委員会 1996 「菖蒲池遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第119集



第39図 新居田B遺跡・周辺遺跡遺構配置図 (1/1,800)

# 写真図版



1 1区全景(東より)



2 1区全景(西より)



3 2号住居址確認範囲



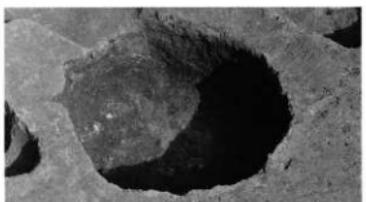
4 2号住居址



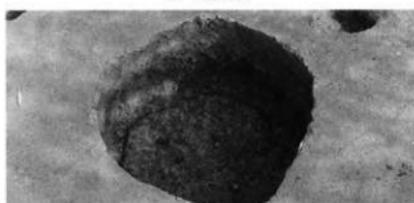
1 1区土坑群(東より)



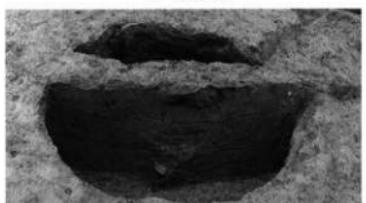
2 1号土坑



4 2号土坑



3 7号土坑



5 同 セクション



6 3号～6号土坑



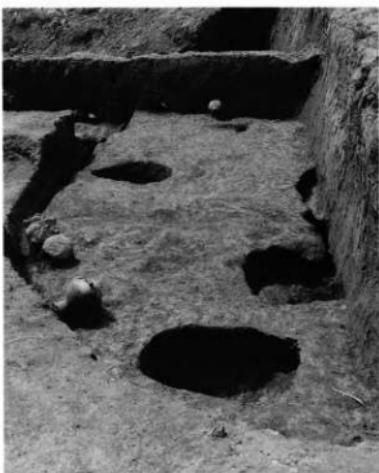
7 8号土坑



8 埋設土器出土状況



1 2区全景（西より）



2 1号住居址（東より）



3 1号住居址遺物出土状況



4 1号住居址（上より）



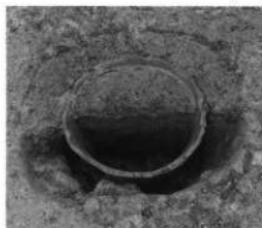
5 3号住居址・1号住居址セクション



6 同 出土遺物



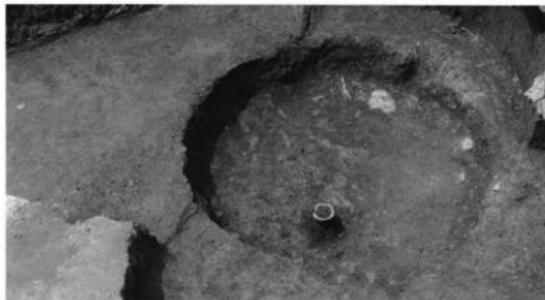
1 3号住居址



3 同 炉



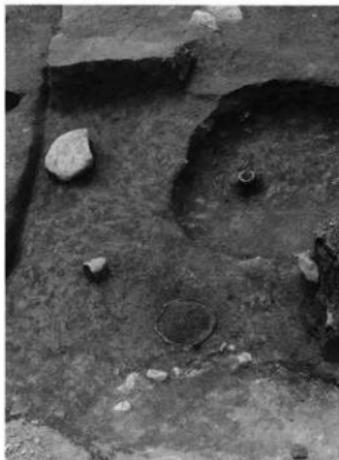
4 同 炉



6 9号土坑



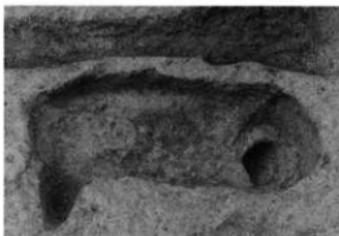
7 同 セクション



2 3号住居址



5 同 炉検出状況



8 21号土坑



2 3区全景（西より）



1 3区全景（東より）

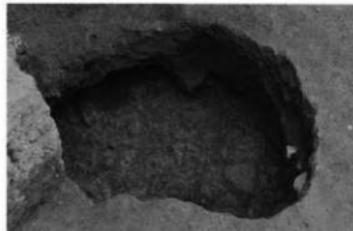


3 3区土坑群

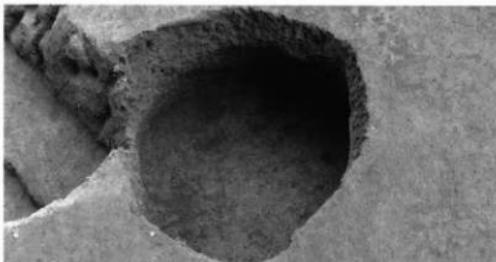


5 3区土坑群周辺遺物出土状況

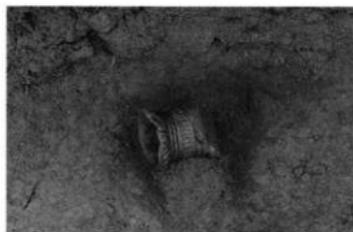
図版 6



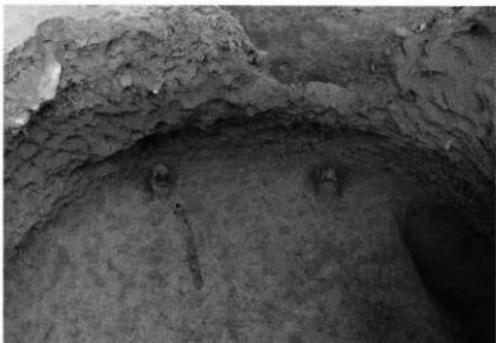
1 10号土坑



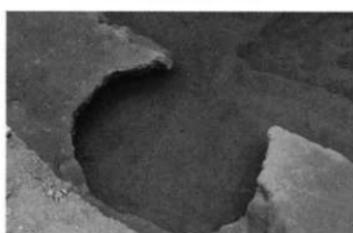
2 15号土坑



3 15号土坑遺物出土状況



4 15号土坑遺物出土状況



5 11号土坑

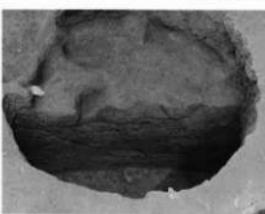


6 11号土坑遺物出土状況

7 12号・13号土坑

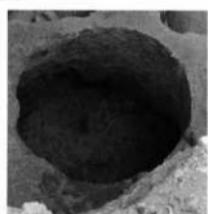


8 14号土坑・5号流路遺物出土状況



9 14号土坑セクション

— 3区土坑 —



10 14号土坑



1 2区作業風景



2 3区作業風景



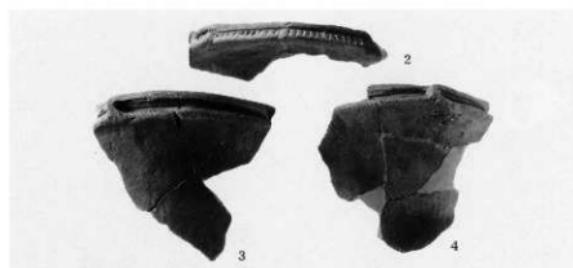
3 3区落込セクション



4 3区基本土層



1



2



3

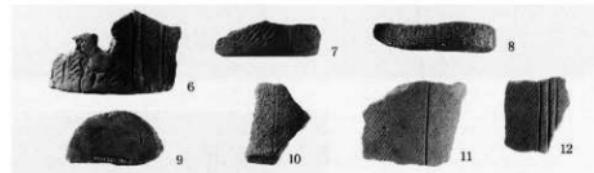


4

3号住居址出土



5



6

7

8

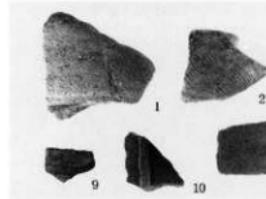
9

10

11

12

3号住居址出土



1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

造構外出土（縄文時代中期）



1



2



3



1

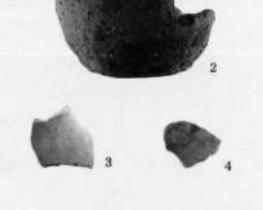


4

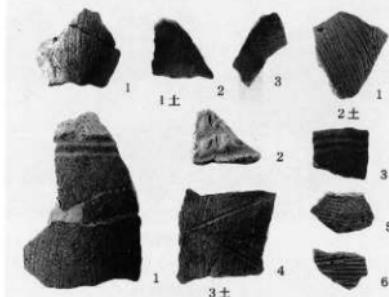
1号住居址出土



1号竖穴状造構出土

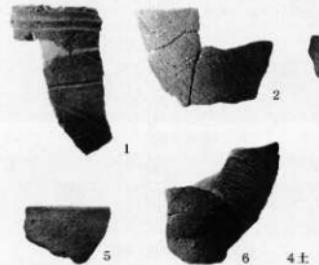


2号住居址出土

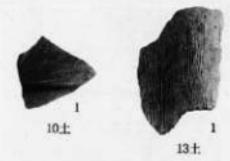


1号埋葬土器

1区土坑出土

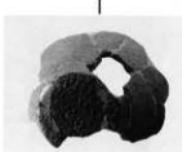


2区土坑出土

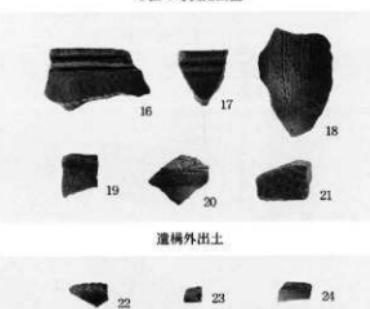
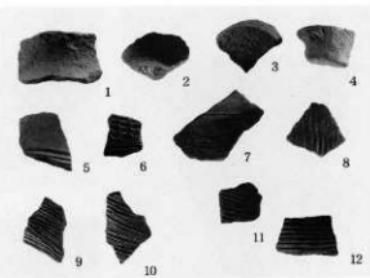
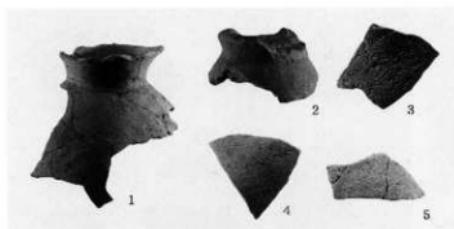


1区土坑・ピット出土

3区土坑出土



15号土坑出土

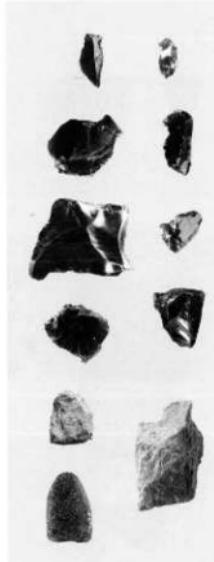


3区5号流路出土

遺構外出土（古墳～平安）



1号型六块構出土



3区土坑出土

遺構外出土

## 新居田B道遺跡報告書抄録

フリガナ	アライダBイセキ
書名	新居山B遺跡
副題	中山間地域総合整備事業 巨摩の郷地区 農道第11号建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ	櫛形町文化財調査報告 No.23
編著者名	保阪 太一
発行者	櫛形町教育委員会・峠中地域振興局農務部
編集機関	櫛形町教育委員会
住所・電話番号	山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1 TEL (055) 282-0180
印刷所	鬼灯書籍株式会社 長野市柳原2133-5 TEL (026) 244-0235
発行日	2002年3月15日
遺跡所在地	山梨県中巨摩郡櫛形町平岡字新居田1142他
1/25,000地図名・位置	小笠原・北緯35° 36' 15" 東經138° 26' 45"
主要な時代	縄文時代中期、縄文時代晚期～弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代初頭
主な遺構	住居址（縄文～古墳）、土坑（縄文～弥生）、埋設土器
主な遺物	縄文土器、弥生土器
調査期間	2001年4月18日～4月28日（1区） 5月24日～6月29日（2・3区）
コード	市町村 193909 遺跡175
調査面積	370m <sup>2</sup>
調査原因	中山間地域総合整備事業 巨摩の郷地区 農道第11号建設に伴う発掘調査報告書

---

---

柳形町文化財調査報告書 №23

**新居田B遺跡**

——中山間地域総合整備事業 巨摩の郷  
地区農道第11号建設に伴う発掘調査報告書——

---

平成14年3月15日 印刷

平成14年3月15日 発行

発行 柳形町教育委員会  
岐阜中地域振興局農務部

編集 柳形町教育委員会  
山梨県中巨摩郡柳形町小笠原397-1  
TEL (055) 282-0108

印刷 ほおづき書籍株式会社  
長野県長野市柳原2133-5  
TEL (036) 244-0235㈹

---

